
受験戦争

西内京介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受験戦争

【Nコード】

N8691Z

【作者名】

西内京介

【あらすじ】

都内屈指の新学校で、受験を控えた三年生が自殺した。警察は受験のプレッシャーによる自殺と断定し捜査は打ち切られようとしたが、疑問を抱いた刑事館林は、ちょうど教育実習で訪れていた瀬郷洋輔に捜査協力の依頼をする。自殺した生徒は、成績も学年トップで、このままいけばどの大学にも入学できるはずだった。それなのにこの時期での自殺は、正直解せないというのだった。進めていくうちに、捜査線上に浮かび上がってきた二人の容疑者。二人とも、成績同率二位を誇る実力者だった……。

次々と浮かび上がる、それぞれの思惑。果たして自殺か、他殺か。全てのピースがそろった時、驚愕の真実が明らかになる。

序章（前書き）

どうも。かなりしばらくぶりの投稿になります。西内です。

この小説は、自分の中でもまあまあ納得のいく作品に仕上げるこ
とができた、と思います。三人称で長編を書き上げられたことで若
干テンションがあがっているからかもしれませんが。

皆様に最後まで読んでいただければ、これほどの幸いはありません。
ん。

序章

青年は目を閉じ、自分の生命を確かめるように、ゆっくりと息を吐いた。両手を広げ、風を全身で受け止めようとしている。

気持ちいい――。

口には出さず胸中で呟いた後に、青年は再び目を開け眼前に広がる光景を、まるで無邪気な子供のような気持ちで見下ろしていた。

この町は、なんて綺麗なのだろう――。

青年は思ったことを口には出さず、胸の内で呟いた。口にしたところで、自分の気持ちを分かち合う人なんてこの場にはいないのだからという、諦めにも似た思いがあったからだった。

一瞬、強い風が吹きつけ青年は危うく落ちそうになったが、なんとかフェンスの網を掴み、堪えた。

風なんかには殺されてたまるか、どうせ死ぬなら自分で――。

その決意は固かった。揺らぐことなく、遺書を書き、屋上のフェンスを乗り越え、ようやくここまでやってこられたのだ。風のせいで、生涯を終えることがあってはならない。

しかし、後一步。後一步を踏み出すことが出来なかった。

もう少しなのに――。

悔しさと、自分の情けなさに涙を堪えきることができなかった。

まさか、後悔しているのか――。

心の底から涙を流している自分に気づき、自問した。残念ながら、答えを出すことは出来なかった。

もう十分じゃないか――。

その時、学ランのポケットに入れてあった携帯が震えた。誰からか、着信が入ったのだ。

自殺する前に人と話すのは、あまり気が進まなかった。人と話すことにより、死への躊躇いが生じてしまう可能性があったからだっ

た。

どうすればいいか、そう迷っていると携帯が鳴り止んだ。慌ててポケットに手をつ込み、携帯を取り出した。画面を開いて、かけてきた人物を確認する。

それは、この学園で唯一の友達からの着信だった。

数秒迷った挙句に、青年は自ら友達の携帯に掛け直した。

「もしもし……」

会話は数分続き、青年は携帯を切って夕空を仰いだ。

あいつは何を考えているんだか――。

口元に微笑を浮かべながら胸中でそう呟くと、フェンスに背中を預けて携帯をポケットにしまった。

本心から言うと、友達からの着信は嬉しかった。けど、やはり複雑な心境であった。

揺らぐ決意――ここまで来たのに、また引き下がることになってしまうのか。

顔に、いよいよ突き刺さるような痛みを伴う風が吹いた頃、後ろのほうでドアノブが回る音がして、反射的に青年は振り向いた。

ドアは、まるでスローモーションのようにゆっくりと開いていく。青年はそれをじれったく思い、齒軋りをした。

早く来いよ――。

やがて、ドアは完全に開かれた。

第一章

不意に、今まで聞いたことのないような、不快感極まりない音が耳に入ってきた。

瀬郷洋輔は読んでいた本を閉じて、ゆっくりと音のした方向へ顔を向けた。

音が聞こえてきたのは、ここからそう離れていないな――。

そう思い、席を立って洋輔は図書室を出た。

洋輔は某有名大学に通う二年生で、教育学部に所属している。専攻は歴史。教育実習生として、洋輔は今日、都内でも屈指の進学校、宝徳学園へとやってきた。

今日は初めてということあって、教室の後ろで世界史の授業を見学しているだけだったが、早くも洋輔の心は折れかけていた。

生徒の出来が、想像以上によすぎるのだ。自分よりも、もしかしたら頭がいいかもしれない――そんな不安が、洋輔によぎった。高校生より頭が悪いと示しがつかない。そう危惧した洋輔は、閉館時間のギリギリまで、宝徳学園の図書室で勉強しようと考えたのだ。

その最中に、遠くから肉の潰れたような音がしたのだ。集中力は途切れ、同時に洋輔の好奇心を駆り立てた。

宝徳学園の敷地面積は広大なため、まだどこに何があるのか把握できておらず、図書室を出てから洋輔は早速迷った。自分がどこを歩いてきたかさえ、記憶が曖昧だった。

とりあえず、出てきたからにはあの音の正体を突き止めなければならぬ。そんな使命感にも似た思いを抱きつつ進んでいると、窓の向こうに人だかりが見えた。

「なんだ？」

目を凝らして、人だかりをしてみる。

宝徳学園には三つの校舎がある。一二年の教室が主の、第一校舎。三年の教室と、進路のための資料室が設けられている第二校舎。図書室や保健室、食堂などがあるのは第三校舎で、この三つの校舎は縦に三列で並んでおり、二階の渡り廊下によって繋がれている。洋輔がいるのは、第三校舎の一階。人だかりがあるのは、第三校舎と第二校舎の間に位置する中庭である。

洋輔は足早に人だかりを目指した。

外へ出るための通用口を開き、今度は駆け足で人だかりのもとへ向かう。

数十人の生徒たちは、真ん中にあるものを取り囲むようにして集まっていた。

「なんだよ……これ」

動揺する声が、ちらほらと聞こえてきた。中には、嗚咽も聞こえてくる。洋輔の好奇心は、それに比例するようにますます高くなっていた。

洋輔は、生徒たちが取り囲んでいるものは何なのか覗こうと背伸びをしてみるが、如何せん身長には恵まれていなく、しかも前にいる男子生徒の身長がかなり高いため、何を取り囲んで動揺しているのか見えなかった。

「あ、先生」

一人の女生徒が洋輔の存在に気づき、振り返って声をかけてきた。その女生徒のことはよく覚えていた。今日の昼休み、声をかけてきた女の子だ。

宝徳学園は先ほども説明した通り都内屈指の進学校で、生徒たちはお互いをライバル視しており暗い子が多いのだが、声をかけてきた女子は他の生徒たちとは正反対の明るい子で、食堂でメニューを眺めていた洋輔に、気さくに声をかけてきたのだ。そのため、彼女のことは洋輔の記憶に強く残っていた。

そんな彼女が、今泣いているのだ。目は充血しており、今も頬に涙が伝っている。どうして泣いているのか、洋輔には皆目見当がつか

なかった。

心配になった洋輔は、生徒たちを強引に掻き分けて取り囲んでいたものを見た。

それを見た瞬間、絶句した。

洋輔の目の前には、血の池が出来ていた。内臓やら脳が飛び出ている物体が、そこにはあった。見る限り男子生徒のようだが、学ランがなければおそらく判別がつかなかっただろう。それほどに、凄惨な死体だった。これはいったいどういうことなのか。

状況をよく理解できず、洋輔は頭の中で瞬時に様々なことを思い浮かべた。

その中の一つに、投身自殺という四文字がよぎり頭上を見上げた。唯一、第三校舎には屋上がある。そこから、この男子生徒は飛び降りたというのか。

そう考えると、途端に眩暈が襲ってきて、膝をついた。洋輔に声をかけた女子は短い悲鳴を上げ、前にいる男子生徒は彼女の悲鳴に驚いてこちらを振り返った。

「先生、大丈夫？」

女生徒は、手に握り締めていた紙を丸めてポケットにしまうと、心配そうな声を上げて洋輔に駆け寄った。その声に若干の安心感を抱きつつも、やはり心の中にある不快感を払拭することは出来なかった。

図書室で聞いた肉の潰れる音の正体は、この男子生徒が飛び降りて地面に衝突した時の音だったのだ。

そう思うと背筋に悪寒が走り、吐き気がこみ上げてくる。洋輔が口に手を当てると、女生徒はそれを察して背中 hands を当て、さすり始めた。周りの生徒たちは、洋輔達に注目している。

「どうしてこんなことが……」

鼻息を荒くしながら、洋輔は心の底から振り絞るように言った。「おい、どうしたお前たち」

不意に、遠くから野太い声が飛んできた。生徒たちは、声の主を

振り返る。

近づいてきたのは、生徒たちから恐れられている体育担当の教師、山田哲郎だった。

この高校に通う生徒たちは勉強ばかりを必死に取り組み、運動部は一応存在するが所属している生徒は少ない。

つまり皆、体育が嫌いなのだ。

しかし山田は、体育の見学を相当な理由がないと認めなくて、生徒たちは嫌々体育の授業を受けている状況だ。生徒たちが嫌うのも無理はない。

そのゴリラみたいな顔と、身長百八十センチという大柄な体格がまた、生徒たちに別の恐怖を与えているといえる。

「何があった、ええ？」

生徒たちは萎縮して、山田に何も話そうとはしない。

「あれ、瀬郷君。どうした？」

女生徒に背中をさすられている洋輔を見た山田は、一瞬にやついた表情を浮かべ、中腰になって訊いて来た。

「いえ……あの……」

洋輔も、上手く説明することが出来ないので、代わりに男子生徒の自殺死体を指差した。怪訝そうな表情を浮かべつつも、山田は指さされたほうに顔を向けた。

男子生徒の自殺死体を見た瞬間に、みるみる山田の表情を青ざめていき、先ほどまでの威勢は感じられなくなった。

「あ……あ……」

口をパクパクさせ、山田も男子生徒の死体を指差していた。その光景は滑稽だったが、残念ながら洋輔もそれと同じような状態で、笑える立場ではなかった。

「と、とにかく、先生に知らせないと」

独り言のように呟くと、山田はどこかへ走っていった。職員室へと向かったのだろう。

「先生、とにかく保健室へ行こう」

女生徒に優しく声をかけられ、洋輔は情けない気持ちになりながらも、頷いた。今はとにかく休みたいのだ。
体を支えられながら、洋輔は保健室のある第三校舎へと戻った。

第二章

「先生って、ついていないね」

保健室に入ってから、棚に並べてある薬品を眺めていた女生徒は、呟くようにいった。

「何が？」

気持ち悪いせいもあって、洋輔はぶっきらぼうに言った。

「だって、教育実習に来たのにこんな事件に出くわすんだもん」

女生徒の言葉には答えず、洋輔はしばらく辺りを見渡して、手近にあった椅子を引き寄せ座った。

「確かにそうだな」

改めて女生徒の言葉を考えてみると、納得のいく部分があった。

洋輔は、一ヶ月とはいえ教師の体験をするために宝徳学園へ赴いたのだ。高校教師というのは、中学生の頃からずっと抱いていた将来の目標でもあった。昨晩は、楽しみと不安でほとんど寝付けなかったぐらいである。

待ちに待った教育実習の初日に、こんな事件に出くわすなんて誰が想像できただろうか。洋輔は狼狽を隠すことが出来なかった。

「あれ……自殺だよね」

女生徒は依然薬品を眺めながら、後ろに座っている洋輔に訊いてきた。女生徒の口調には、まるで自分に言い聞かせるかのような響きがあった。

彼女自身も分かっているはずだ。あれは飛び降り自殺のなにものでもないということを。分かっているが、誰かに問いたかった。洋輔には、そのように見えた。

女生徒の肩がかすかに震えているのに、洋輔は気づいた。そういえば、死体を見ていた彼女の目は赤かった。泣いていたのだ。

死体を見たから彼女は泣いたのか。女の子だから、それが普通の

反応なのかもしれない。実際、他の女生徒からも嗚咽が聞こえた。しかし洋輔は、はっきりと根拠があるわけではないが、女生徒が泣いたのは、死体を見た以外にも何か特別な理由があるような気がしていた。

洋輔が何か口を開こうとしたと矢先、奥の部屋から養護教諭の松平邦和姿を現した。その表情は、険しかった。

松平はオールバックにして髪を後ろにまとめており、山田に勝るとも劣らない体格をしていた。昔、いかにもスポーツマンだったという風格を漂わせている。洋輔は、松平と接するのに若干の抵抗を抱いていた。

「はい」

片手に持っていた物を、松平は洋輔に差し出した。それは、一粒の錠剤だった。

「吐き気が止まると思うから」

「けど、いいんですか。勝手に飲んじゃって」

他人から貰った薬を服用してはいけないと、何回か保健の先生に注意されたことがあるのを、洋輔は思い出す。

「大丈夫、大丈夫。市販だから、誰が使っても同じだよ」

宝徳学園には似つかないほど、松平の性格は楽観的であった。

「しかしまあ、驚いたね。生徒が自殺なんて」

松平がベッドに腰をかけた時、軋む音が保健室中に響いた。その音に洋輔は大げさに肩をびくつかせたが、薬品を眺めたままの女生徒は無反応だった。

「佳代ちゃん、詳しい話を聞かせてくれないか？」

と、松平は女生徒のほうへ顔を向けた。佳代と呼ばれた女生徒はようやくこちらへ振り向いた。佳代は、ぎこちない笑顔を浮かべていた。

「私、他の生徒たちのように中庭で勉強していたんです。そしたら突然、耳に不快な音が入ってきて、見たら人の死体があって……」

喋っていくうちに感情が高ぶってしまったのだろう、笑顔を崩し

彼女は両手で顔を覆った。松平は後悔した表情を作り、再び洋輔のほうへ顔を向けた。

佳代はとっくのとうに限界を迎えていた。さきほど薬品を眺めていたのも、気持ちを紛らわすためだったのだろう。そして振り返った時、彼女は笑顔を浮かべていたが、やはり無理やり取り繕ったものだった。こちらに悟られまいと、懸命に振舞っていたのだ。

そんな彼女を、洋輔は不覚にも愛おしく思ってしまった。その感情の正体が果たしてどのような類のものなのか、幸いにも洋輔はつかめていなかったが、気づくまで最早時間の問題だった。

「しかし、どうして自殺なんか……」

「君は、自殺と断定しているようだね」

「は？」

松平は意味深な表情を浮かべた。

「自殺ですめばいいんだけどね」

「どういことですか？」

洋輔が訊くと、松平は突然我に返った顔をして、やがて表情を和ませ言った。

「中年の、独り言だよ」

そんなこと言われても、洋輔には松平の言葉を独り言として聞き逃すことなんかできなかった。

自殺じゃなければなんなんだ——洋輔は、心の中で憤慨した。

「そういえば、君は今日来た実習生の一人だよね？」

「え、あ、はい」

唐突に話題を変えられ若干戸惑ったが、洋輔は頷いて言った。

「ついていないね、一目目だというのにこんな目にあって」

不謹慎だが、洋輔は吹き出しそうになった。佳代と同じ事を言っていたからだった。

「死体を見て、気持ち悪くなったのか」

松平はじつと洋輔の目を見つめながら、訊いてきた。洋輔は見栄を張ることなく、黙って頷いた。

「そうか」

頷きながら、松平はゆっくりと洋輔の手のほうへ視線を移動させ、しまったという表情を浮かべた。

「ごめんね、忘れていた。水だよ。そうだよ、水だよ。水がなきゃ、薬飲めないよね」

言いながら立ち上がって、松平は奥の部屋へと姿を消した。

正直言うと、洋輔はこの薬を飲むのに躊躇いがあった。市販といえども、他人から渡された薬はやはり飲む気にはなれなかった。

「ねえ、先生」

不意に、佳代は声をかけてきた。昼休みの時に声をかけてきた彼女とは思えないほど、その姿は憔悴しきっていた。

その様子に、洋輔はかすかな違和感を抱いていた。

「私……どうしたらいいのかな？」

佳代が何を言っているのか、意味が分からず洋輔が顔をしかめていると、勢いよく保健室のドアが開いた。

ドアのほうへ振り向くと、そこには息を切らした男子生徒が立っていた。

「佳代！」

男子生徒は佳代の名前を叫び、堂々とした足取りで保健室へと入ってきた。

真ん中へ来た辺りで、男子生徒はようやく洋輔の存在に気づいたらしく、嫌悪感を露にしたが、それでも佳代のほうへと近づいて行った。

「何よ」

佳代は今にも泣き出しそうな顔をしている。声も震えていた。

「ここに入ったところを見て、来たんだ」

そう言うと、男子生徒は佳代の腕を掴み無理やり連れて行こうとした。

「ちょっと、何よ！」

佳代は激しく抵抗したが、男子生徒の力には太刀打ちすることが

出来なかった。

「俺と一緒に来るんだ！」

「離して！」

「ちょっと、君」

見かねた洋輔は、男子生徒のもとへ行き佳代から引き離れた。

「何すんだよ、おっさん」

「おっさん、って」

俺はまだ二十一だぞ、という言葉が喉まで出掛かったが、ぐっと堪えて大人な対応を心がけた。

「彼女嫌がっているぞ」

「俺にはそう見えないね」

この自惚れている男子生徒を、思いつき罵ってやりたいという衝動を何とか抑え、無感情で洋輔は言った。

「君は彼女のなんなんだ？」

「どういう意味だよ、それ？」

男子生徒は食って掛かってきた。

「お前、佳代の彼氏気取りか？」

宝徳学園の生徒とは思えないほど、男子生徒の気性は荒く幼稚だ、洋輔はそう思った。相手にするだけ、時間の無駄かもしれない。

「俺はな、佳代の――」

「赤の他人だよ、こいつ」

男子生徒の言葉を遮り、佳代は驚くほど冷たい声で答えた。

「な、何？」

「うっさい、本城」

変わらぬ冷たい口調で、佳代は本城と言う男子生徒に、突き放すように言った。

「本城って……」

動揺を、本城は隠そうとしなかった。察するに、冷たくされたのが驚きだったのだろう。

洋輔は、本城と佳代の関係性がつかめなかった。

「なあ、お前――」

「止めて！」

無理やり引き寄せようとする本城の手を、佳代は叫びながら振り払った。その時、ポケットから丸められた一枚の紙が落ちてきた。

「それ……」

本城が拾おうとすると、佳代は覆いかぶさるようにして紙を拾った。

紙を入っていたポケットにしまい、佳代は立ち上がって洋輔のほうへ顔を向けた。

「じゃあね、先生」

小さい声で言うと、目を伏せながら佳代は保健室を出て行った。本城は手を伸ばして佳代を止めようとしたが間に合わず、がっくりと肩を落とした。

「くそっ！」

悪態をついて、本城は洋輔のほうへ顔を向けた。

その表情は何か言いたげであったが、結局何も言わないで保健室を出て行った。その後姿は、どこか寂しげであった。

佳代と本城は付き合っていたのだろうか。しかし、佳代は本城に対して、理由は分からないが怒りを抱いていた。赤の他人だと、佳代は躊躇うことなく洋輔に言っていた。

解せないことはたくさんあるが、今は関係ないだろう、そう自分に言い聞かせ、洋輔は座っていた椅子のほうへ体を向けると、視界にコップを持っている松平の姿が映った。

「あ、先生。見ていたんですか？」

意味ありげな微笑を浮かべながら、松平は洋輔に近づいてくる。

「邪魔しちゃ悪いと思ってね」

洋輔は、その言葉の意味を理解するのに時間はかからなかった。

「二人は付き合っているんですか？」

興味なさそうに素っ気なく訊いたが、内心では知りたくて仕方がなかった。

「いや、違うと思うよ」

松平の答え方も素っ気無かった。

「違うんですか？」

「多分ね」

思わず聞き返してしまった洋輔に、松平は訝しげな眼差しを向けた。

「いや、ほら、なんかそんな雰囲気があったから」

慌てる洋輔に、松平はにやけながらコップを差し出した。

「よかったな」

「何がですか？」

松平が何を思ってたと言ったのか、本当は洋輔自身も分かっていたはずだ。けど、それを認めたくない自分がいた。

「佳代ちゃん、男友達いるからなあ」

聞き流そうとしたが、無理だった。

「さっきの彼、ええっと……そうだ、本城君とも仲いいし、それと誰だったかな、凄い頭のいい子……やっぱ思い出せないわ」

無理に思い出そうとして頭を悩ませている松平を尻目に、洋輔は佳代のことを思い浮かべため息をついた。所詮、自分と佳代は、教育実習生と生徒の関係なのだろうと。

「そういえば、君は佳代ちゃんと仲がいいのかい？」

「え？」

思わず声をあげてしまったのは、心の奥に秘めているものを松平に見透かされたからだと思ったからだ。

しかしすぐそれを打ち消し、松平の質問に答える。

「まあ、仲いいかは分からないですけど、彼女のほうから声をかけてきてくれて、少し話したんです」

「なるほどな」

どうやら、松平は納得の様子だった。

「この学園では珍しいくらい、明るい子だ」

松平の言うとおり、彼女の明るさはこの学園に似つかわしくなか

った。実際、洋輔は教育実習生として今日、この学園を訪れてから生徒たちが仲良くお喋りをしている風景を見ていない。皆、人と接することを嫌い勉強ばかりをしていた。正直、洋輔はうんざりしていた。せめて楽しく、教育実習をしたかったのだ。そう思っていた矢先に、彼女と出会った。洋輔は少し救われた気がした。

佳代に特別な感情を抱いていることは、言うまでもないだろう。だが、洋輔はそれを決して認めはしなかった。そんな不純な動機から、教師になったと思われたくないからだった。

「保健室にも、前は時折顔を見せてくれる程度だったが、最近はよく来てくれてね。私の話し相手になってくれてるんだよ」

頷きながら、洋輔は松平にかすかな嫉妬を感じていることに気づき、自分を叱咤した。

「けど、彼女の様子少し変じゃなかった？」

「変ですか？」

佳代の普段をあまり知らない洋輔に言われても、答えられるわけがなかった。まさか松平は、自分の気持ちを知ってわざとこのような質問をぶつけたのではないか、そのような疑いを洋輔は向けた。

私は、普段の彼女のことを知っているよ――。

松平の目は、そう言っているような気がした。

「なんか、いつもと違うような」

やっぱりだ。洋輔は冷ややかな気持ちで松平を見つめた。

「けどさあ、普通人が死んだくらいであんな泣くかねえ」

「さあ」

洋輔は素っ気無く返し、さっさと薬を飲んでこの保健室を出て行くとした。

一錠の錠剤を口に含み、水でそれを無理やり体の中に流し込む。松平はその動作に目をくれず、なにやら腑に落ちない点をあげているようだった。

「なんであんなに泣くのかな。やっぱり死体を見ると、悲しいのか。彼女だったら、泣くのか。けど……」

コップをテーブルに置いて、保健室を出て行く準備を始めると、松平は声をかけてきた。

「ねえ、やっぱり佳代ちゃんに限らず、普通の女の子であればシヨツクで泣くのかな？」

佳代に限らずというのと、松平の目がいつそう真剣になったので、洋輔は少し答える気分になった。

「そう言われると、そうですね」

洋輔は、死体を見ていた時の生徒たちを、脳裏に思い浮かべていた。

死体を囲んでいた生徒たちは狼狽を浮かべていたが、涙を流している者はほとんどいなかった。女子は、何人か嗚咽を漏らしていたが、佳代みたいに号泣している者はいなかった。

あれが彼女だといわれればそれまでだが、普通に考えれば、誰か分からない死体を見ただけで目を赤くするほど泣く者はいない。

「私の、気にしすぎかもしれないけどね」

そう言って、松平は重くなった空気を和ますかのように笑いながら言った。つられて、洋輔も笑った。

けど、心中は穏やかじゃなかった。

松平のおかげで、佳代という女の子のことをもっと知りたくなってしまった。

その中には好意というものもあるが、それだけじゃない。松平が口にした疑問が、洋輔の中でも引っかかっていた。

「薬、ありがとうございます」

ここで長く考えていても仕方がない。洋輔はお礼を言って、足早に保健室を出て行った。

見送ると、松平は静かになった保健室を見渡し、そして佳代たちが来る前までやっていた実験を再開するため、奥の部屋へと消えた。

第三章

現場にいた者たちは、警視庁からやってきた刑事たちによって食堂に集められていた。集められた生徒たちは、こんな状況にも関わらず勉強に励んでいる。

食堂は第三校舎の二階にあり、全校生徒が食事をできるようにかなり広く設計されていて、お互いが向き合う形で作られた、百人座れる長テーブルが縦に六列並べられている。集められたのは三十人で、一つの長テーブルに間隔を空けて座らされていた。

洋輔は貧乏ゆすりをしながら、腕時計に目を落とした。

時刻は、六時を回っていた。集められてからすでに一時間近く経過しているが、それきり刑事たちは食堂に姿を現さない。色々と調べることもあるのだろうと、洋輔は無理やり自分を納得させようとしたが、一向に収まることのない吐き気と若干の眠気がそれを妨げていた。

松平からもらった薬を飲んでも吐き気は収まらず、むしろ飲む前よりも悪化しているように感じ、さらに眠気も襲ってきているのだ。市販だからといって、やはり他人からもらった薬は飲むものではないなど、洋輔は学んだ。

洋輔は背もたれに背中をうずめると、長テーブルを見渡した。

食堂に集められてから、時間がもったいないとばかりに集められた生徒達が勉強をしている。

この状況で、よく勉強してられるよな――。

軽蔑の眼差しを向け、胸中で洋輔は呟いた。

不意に佳代のが心配になった洋輔は、一番奥のほうへ座っている佳代のほうへ顔を向けた。両手で顔を覆い、リズムよく肩を動かしている。佳代が負った心の傷は相当深いようだった。

と、ここで洋輔は松平に言われた一言を思い出した。

佳代の様子が変わではないかと、松平は指摘していた。確かにその言葉には、納得のいくところがあった。

あの死体を見てから、彼女はずっと泣き続けていた。何に対して泣いているのか、洋輔にはもはや分からなかった。

死体を見たショックから泣いているのか、それとも……。

「皆様、お待たせしました」

六時三十分——ようやく、二人の刑事が警察手帳を掲げながら食堂に姿を現した。

「警視庁捜査一課の、館林と申します」

「同じく警視庁捜査一課の、海藤と申します」

館林と名乗った男は、いかにもベテランという風格を漂わしていた。素人の洋輔にも、只者ではないと分かる。短髪で、端正な顔立ちをしている館林は、実年齢よりも若々しく見えた。

一方の海藤という男は、少々肥満気味で、スーツを身軽に着こなしている館林とは違い、ラフな格好をしていた。それが、洋輔に不快な印象を与えた。

「すみません。調べたいことがたくさんあって、時間がかかってしまいました」

「調べたいことって、あれは自殺じゃないのですか？」

一人の男子生徒が、勉強している手を止め挙手をして発言した。

「ええ。その可能性は大きいと思います」

にこやかな表情で、館林は答えた。

洋輔は再度、佳代のほうに視線を向けた。依然として佳代は、両手に顔をうずめたままだった。

おそらく館林たちは、死体についての情報を自分たちに話すだろう。佳代は、その情報を聞くのが辛いはずだ。これ以上、佳代の泣いている姿は見たくない——。

そう思い立ち上がった洋輔は、抗議するため館林のほうへ顔を向けて言った。

「これ以上、僕たちを拘束しないでください」

「はい？」

腹の底から声を出したつもりであったが、死体を見た時からの吐き気のせいで、上手く声に出すことが出来なかった。

仕舞いには、その場に倒れてしまった。

「大丈夫ですか！」

海藤が、その巨体を揺らして洋輔に近づいてくる。館林も、心配そうな眼差しを洋輔に向けている。

「館林さん、凄い熱です」

海藤は、洋輔の額に手を当ててから言った。

「どうしたんだ」

先ほどまで静寂に包まれていた食堂は、一気にざわつき始めた。周りの生徒たちは、口々に何か呟いている。

「どうしましたか？」

館林は洋輔のそばまで行くと、洋輔の頬にそつと手を当てて、すぐ離れた。

「病院に連絡だ」

いよいよ大事になってきた。海藤はポケットから携帯を取り出し、病院へ連絡を入れた。館林は、動揺する生徒たちを落ち着かせる役目に徹していた。

「大丈夫です。きっと、助かります」

数十分経った頃にサイレンの音が遠くから聞こえてきた。サイレンの音を聞いて、洋輔は薄れ行く意識の中、ようやく事態を把握し、胸中で呟いた。

俺、運ばれるんだ――。

目を覚ますと、病院独特の香りが鼻につき思わず顔をしかめた。大人になっても、この匂いには慣れないなど、洋輔は心の中で自嘲した。

しばらく朦朧としていた意識だが、徐々にはっきりとしてきて、やがて両腕に激痛を感じるようになった。

激痛の正体を確かめるため両腕を上げようすると、右腕が何かに引っかかり動かすことが出来なかった。

顔を右に向けると、包帯を巻かれた腕に点滴がさしてあった。同じく左腕にも包帯が巻かれていて、洋輔の不安は煽られるばかりだった。

色々この状況について聞きたいことが山ほどあったが、あいにくここは個室で、周りには誰もいないため、知ることは出来なかった。

それにしても、何故自分は病院に運ばれたのだろうか。その疑問が、真っ先に脳裏をよぎる。

普通に考えればおかしかった。死体を見て気持ち悪くなって倒れたとはいえ、病院に搬送され、両腕に包帯を巻かれて点滴がさされているという状況になるはずがなかったからだ。

今思えば、体調が急激に悪化したのは保健室を出てからである。

保健室にいた時、自分の身に何かあったのだ。

病院に搬送される理由を決定付けた、何かが。

「目が覚めましたか」

思案する間もなく、病室に二人の男が入ってきた。警視庁からやってきた、館林と海藤だった。

「随分、苦しそうですね」

洋輔のこの状態を見て、海藤はそう発した。口調には、デリカシ一の欠片も込められていなかった。

隣の館林のほうへ目をやると、まるで洋輔の姿など目に入っていないようで、思索にふけっているように見えた。

「しかし、驚きました。いきなり倒れたんですもん」

洋輔は、海藤という男にあまりいい印象は持っていなかった。口調といい、その格好といい、腹立たしさが湧いてくる。が、当然そのようなことは口に出せず、代わりに目で訴えていた。

海藤はそれに気づく様子もなく、べらべらと喋り始めた。

「瀬郷洋輔さんでしたっけ。聞きましたよ、職員の先生から。あな

たはあの城東大学に通っているんですってね。なかなか優秀じゃないですか。まあ、優秀じゃなければ宝徳学園の教育実習生なんて務まらないですもんね。本当、すごいです。けど、ついていませんよね。初日からこんな事件が起きちゃ。大学に戻ることになっちゃうんですかね」

我慢できなくて、助けてもらうつもりで館林へ視線を向けた。

しかし館林は全く気づかず、依然として考えを巡らせているようだった。

館林にとって何か引かかることでもあるのだろうか、そう思い始めた洋輔の耳には、最早海藤の言葉など耳に入ってこなかった。

「僕も教師になりたいと思った時期はあったんですけど、高校二年生のときに転機が訪れましてね。警察官に助けてもらったことがあるんですよ。落し物を届けてくれたんです。警察官って意外といい仕事なのかもな、って思い始めて、そしたら決断するまで早かったですね。大学への進学も当時は考えていたんですけど、僕は警察官になろうと思って――」

「ちょっといいですか？」

館林は強引に話を遮り、洋輔のほうへ顔を向けた。海藤は話を邪魔されたことへの不快感を隠そうとはしなかった。

「すみません、お疲れのところ。状況を軽く説明してから、一つ質問をさせてください」

海藤の話を永遠されるよりかは、館林の質問を受けていたほうがはるかにまじだった。

「医師の方に無理を言って面会をさせてもらっている状況なんで、手短にすませますね」

館林の言い方には、暗に海藤への非難が込められていた。

「この三日間で分かったことが一杯あるんですよ」

「三日間？」

洋輔は思わず聞き返した。

「三日間も僕は眠っていたんですか？」

「まあ、そう……なるんですかね」

歯切れの悪い返答に、洋輔は首を傾げた。

「非常に危険な状態だったと、担当の医師から聞かされました」
脱力してしまった洋輔を尻目に、館林は続けた。

「あなたは第三校舎にいたそうですね」

力なく、洋輔は頷いた。

「中庭に向かった際、誰かと会いませんでしたか？」

「誰か？」

館林の質問の意図が分からず、洋輔は首を傾げて呟いた。

「とくに誰も見ませんでしたけど……」

と、ここで洋輔はようやく館林の考えに気づいた。あの思案顔も、これで合点がいく。

「もしかして館林さんは、これを自殺じゃないと考えているのですか？」

洋輔の鋭さに館林は少なからず動揺を見せたものの、刑事というだけあってすぐに立て直した。

「詳しいことはお話できません」

本心から発せられた言葉だった。これ以上は、いくら粘ってもきつと話してくれないだろうと、洋輔は潔く諦めた。

「目が覚めたとはいえ、まだ絶対安静なんですから。また後日、お伺いします。その際、他の方々に提示した情報はお話します。それと、あなたの身に何が起こったのかも」

そんなことを言われても、落ち着いて眠れそうになかった。この三日間、何があったのか。何故警察は他殺の可能性も視野に入れているのか。

きっと、自分以外の現場にいたものはある程度の情報は聞かされているのだろう。高熱で倒れさえしなければ、こんなもどかしい気分など抱かなくてもすんだのにと、洋輔は後悔していた。

「それでは、また。お大事に」

言うと、館林は足早に病室を去っていった。海藤は、さきほど話

を遮られたのをまだ根に持っているのか、不機嫌さを露にして館林の後に続いた。

洋輔は枕に頭を押し付けて、ゆっくりと瞼を閉じ、これからのことを頭に思い浮かべた。

当然だが、教育実習は中止になるだろう。生徒の自殺騒動が起り、その上高熱で倒れてしまい、教育実習どころではなくなってしまった。数ヵ月後には、平凡な大学生活を再開しているに違いない。そう思うと、気が滅入ってくる。

一度でいいから、生徒たちに授業してみたかったな――。

洋輔は、胸中で呟いた。

悔しかった。何も出来ないのが非常に悔しくて、情けなかった。けど、どうすればいい。宝徳学園はおそらく休校になり、洋輔は大学へ戻ることを余儀なくされる。

自嘲気味に、洋輔は笑った。

どうしようもないじゃないか。

保健室で何があったのか考えるのを忘れ、洋輔は悔しさのあまり声を押し殺して涙を流した。

第四章

数日後、洋輔は順調に回復していき、包帯もとれて自力で歩けるようにまでなった。

「よかったですね、瀬郷さん。あともう少しすれば、退院できますよ」

早朝、洋輔の病室にやってきた担当医師の長谷川は、快活な笑顔を浮かべて言った。

「もう少し時間かかると思っていたんですけどね」

長谷川の口調は、本心から喜んでるように感じられた。それが、洋輔にとっては嬉しいことだった。

長谷川は医師になって日は浅いが、それ故に患者のことを一途に思える、汚れていない純粹な心を持っていた。年もそれほど離れていないため、洋輔は長谷川という医師に対して親近感を抱いていた。「本当にありがとうございます」

洋輔も、本心からお礼を言った。

「いえいえ。けど油断しないでくださいね。まだ退院ではないんですから」

長谷川の釘を刺すような言い方も、洋輔は許せていた。

「じゃあ、長谷川先生。そろそろ教えてくれますよね」

洋輔がそう切り出すと、途端に長谷川の表情は曇り始めた。

「そう……ですか」

狼狽を露にして、長谷川は狭い病室を見回している。

「駄目ですか？」

今日こそ引き出してやると、洋輔は心に固く誓っていた。

退院が間近に迫っているのだ。訊くチャンスは、もう残りわずかだ。教えてくれないというのなら、いくら相手が長谷川でも暴れてやる覚悟でいた。

「分かりました。隠していても仕方ないことですし」

ようやく長谷川は、洋輔に話す覚悟を決めた。ずっと粘った甲斐があったと、洋輔は胸中で呟いた。

数日前、刑事たちがここを訪れてから洋輔にはずっと引っかかっていたことがあった。

自分の両腕に巻かれている包帯は、一体何なのか。

食堂で、気分が悪くなり倒れたというところまでは覚えていたが、それ以後の記憶は全くないのだ。倒れただけで腕に包帯が巻かれたとも考えられない。ということはつまり、寝ている間に何かあった、もしくは無意識のうちに何かしていたということになるのだ。

それが分かれば、大分原因を絞り込めるはずだ。

それらのことについて、洋輔は毎朝、長谷川が病室にくるなり訊いていた。しかし長谷川は答えようとせず、ずっとはぐらかしてきただのだ。

今になって、長谷川はその質問に答えてくれようとしている。退院が間近に迫っているので、喋ってくれる氣にでもなってくれたのだろう。

「僕からはあまり言いたくなかったんで、ずっと隠してきたんですが。まあ今日、刑事さんもお見えになるそうなんで、どうせ知ることになるでしょうから僕からご説明します」

刑事がやってくるというのは、初耳だった。そのことも、洋輔を動揺させないための親切心から隠していたのだろう。

「まず一つ、お聞きしたいことがあるんですが、いいですか？」

「はい」

洋輔は、並々ならぬ緊張感を感じ取って、思わず生唾を飲み込んだ。長谷川の表情には、いつも浮かべている笑顔はなかった。

「単刀直入に窺います。倒れた当日、何か変なものでも口にしましたか？」

「変な物？」

瞬時に、養護教諭の松平からもらったあの薬を思い浮かべた。

「変な物っていうか……強いて言うなら、薬ですかね」

「薬？」

「ええ。僕、自殺死体を見たときに気分が悪くなっちゃって、保健室へ行ったんです。そしたら、養護教諭の松平先生が薬をくれて」

「どのような薬ですか？」

「吐き気を抑えるための薬、って言っていました」

洋輔は、他人から受け取った薬を飲むかどうか最後まで悩んだが、松平の厚意を無下にすることもできず、結局飲んでしまった。

予感があったが、やはりあの薬がいけなかったというのか。

「他人から、薬を受け取って飲んだと言うのですか？」

長谷川は咎める口調で言った。

「いや、僕も最後まで悩んだんですけど……」

言い訳をしようとしたが、途中で言葉に詰まってしまった。

つまり、こうなったのも全て悪いのは自分なのだ。言い訳を並べても仕方ない。

「そうですか」

長谷川の目は険しかったが、洋輔をこれ以上責めるつもりはないようだ。長谷川の関心は、すでに別のほうへあった。

「あの、どうかしました？」

重苦しい沈黙に耐え切れなくなった洋輔は、長谷川の目を覗いて言った。

「……けど、ありえない……」

深刻な顔をして、長谷川は一人で思案していた。時折聞こえてくる長谷川の呟きの意味を、洋輔は知りたくて仕方なかった。

「……薬は、関係ないのか……」

数分、長谷川は頭の中で推理を展開していたが、自分なりに納得したのか、二三度頷いてから別の話題を洋輔にふってきた。

「巻かれていた包帯について、お話ししましょう」

長谷川は、以前包帯が巻かれていた洋輔の両腕に目を落とし、言った。

「どうして包帯が巻かれているのか、理由を説明されなかったから、

気になったことでしょう」

「誰も説明してくれないんですもん」

ふてくされたように、洋輔は言った。

「ええ。言わないほうがいいという、我々の配慮です」

どうりで誰も教えてくれなかったわけだと、洋輔は一人納得した。

「それじゃあ、この包帯は？」

ついに疑問が解消される喜びと、実はそれを知るのが怖いという不安が入り混じり、洋輔は複雑な心境で恐る恐る問うた。

「暴れたんですよ、瀬郷さん」

「暴れた？」

言葉の意味が解せなくて、思わず洋輔は訊きかえした。

「暴れたって、どういうことですか？」

「瀬郷さんは意識不明の重態で、こちらに搬送されてきました。我々が診察している最中に目を覚まされて、急に暴れだしたんです」
長谷川は真剣な表情で話しているが、洋輔にはどうしても信じる
ことが出来なかった。

「僕には暴れた時の記憶は一つもありません。無意識で暴れていた、
って言うことなんですか？」

「そう考えるのが、自然でしょう」

洋輔は、まだ半信半疑な気持ちだった。

「瀬郷さんの両腕に巻かれている包帯も、暴れた際に怪我をしたた
めです」

言われて、洋輔は両腕に目を向けた。

確かに辻褄は合うが、それでも納得のいかない部分が洋輔にはあ
った。

「けど、今までにそんな症例あるんですか？」

「私が受け持った患者さんの中に、そのような人は一人もいません
でしたが、前例としては、薬物中毒者の方が突然暴れだすという……」

最後のほうは言葉を濁して、長谷川は言った。

「俺、薬物中毒者と一緒ですか？」

怒りを押し殺しながら、洋輔は言った。

「いえ、そんなことはありません」

慌てて、長谷川は否定した。

「診察した結果、瀬郷さんに薬物反応は出ませんでした。私は、あくまで前例をあげただけですので、瀬郷さんを薬物中毒者だなんて思っておりません」

必死に弁解する姿が、洋輔には滑稽に見えた。

「いいですよ、もう」

冷めた気持ちで言うと、洋輔は気持ちを紛らわすため、窓に映る景色に目をやった。中庭を一望できるこの個室を充てられたことは少なからず感謝していた。

「あれ？」

中庭をこの病棟に向かって歩いてくるスーツ姿の男が見えて、洋輔は思わず声を上げた。

「どうしました？」

長谷川は立ち上がって、窓の近くまで行き外へ目をやった。

「あ、刑事さんですね」

その口調には、どこか安堵した響きが込められていた。

「それじゃあ、私は刑事さんを迎えに行きますので。しばらくお待ちください」

「はい」

洋輔は刑事が見えなくなった中庭に目を向けながら、返事をした。後ろで、ドアが閉まる音が聞こえてきた。

「お待たせしました」

しばらくすると、長谷川の声とともにドアが開かれる音が聞こえてきた。振り返ると、長谷川の後ろに館林の姿が見受けられた。

「お久しぶりですね、瀬郷さん」

愛想よく館林は挨拶したが、その目は笑っていなかった。

「僕の代わりに説明してくださいね」

長谷川は館林に小声で言った。館林は頷きながら、横目で洋輔の姿を捉えていた。

「分かりました」

一言そう言うと、館林は長谷川に退室を促した。それに従い、長谷川は足早に病室を後にした。

館林は人の笑顔を浮かべて、さきほどまで長谷川が座っていた椅子に腰を下ろした。

数分間、お互い無言のまま見詰め合っていたが、やがて館林が沈黙を破った。

「長谷川先生は、あなたに巻かれていた包帯のことを話しましたか？」

椅子に腰を下ろしながら、館林はゆっくりとした口調で言った。

「包帯は、僕が無意識のうちに暴れて、怪我したから巻かれたんですよね？」

確認を取る口調で、洋輔は言った。

「ええ。その通りです」

「僕が暴れた原因というのは？」

「それはまだ、はっきりと分かっていません」

館林の口調からして、何か隠しているとは思えなかった。

「分かりました」

半ば失望するような気持ちで、洋輔は言った。

「けど、私が今日訪れたのは、そのような話をするためではありません」

刑事の言葉に興味を惹かれ、洋輔は館林のほうを見た。

「事件の説明です」

途端に、洋輔の動機が激しくなった。

「あなたも知っておかなければならない。学園の生徒が飛び降りた事件のことを」

そのことはずっと知りたかった。しかし、この病室にはテレビがなく、出歩いてテレビのある待合室に赴いても事件のことはすでに

報道されていないのだ。新聞も読まないため、事件の知識は皆無だった。

まさか、刑事から直接話を聞けるとは。洋輔にとって願ってもないことだった。

「最初から、説明しますね」

洋輔は、館林の言葉に身を乗り出して頷いた。

第五章

「自殺したのは、宝徳学園の三年生、姫島良助、十八歳です」

館林はスーツの内ポケットから手帳を取り出し、付箋の張つてあるページを開いて読み上げた。

「両親は小学校六年生の頃に他界し、今は親戚に引き取られているそうです」

姫島の紹介を終え、ここから話はいよいよ事件に入った。

「食堂に集めた人たちの事情聴取から、姫島君が飛び降りたのは大休午後四時二十分頃だと決定されました」

「確かにその頃です。肉の潰れる音を聞いたの」

すかさず、洋輔は言った。

「なるほど。その頃、あなたは第三校舎にいた。何故ですか？」

館林は探るような目つきで洋輔を見つめ、質問した。こんな質問されるとは思っておらず、洋輔は動揺した。

生徒の学力が想像以上に高かったから図書室で勉強をしていましたと、正直に答えることに躊躇いがあった。洋輔にだって、羞恥心ぐらいある。

しかし、答えなければ館林の追求は激しさを増すだろう。これを自殺とは考えていないことを、館林は仄めかしていた。つまり、屋上のある第三校舎にいた洋輔を、疑っているのだ。

早く容疑者候補から抜け出すため、洋輔は正直に答えた。

「授業を見学していて、自分の学力の低さを自覚したんです。それで、図書室で勉強をしていました」

顔が熱くなるのを、洋輔は感じた。

「そうですか」

そう言って頷くと、洋輔のしかめ面を見て館林は続けた。

「あ、大丈夫ですよ。別に瀬郷さんを疑っているわけではありません

ん。質問をしたのは、建前ですよ。それに、瀬郷さんが図書室にいたという事実も確認がとれていますんで」

何か言われる前に、疑っていないということを館林は洋輔に分からせた。

「ですので、安心してください」

洋輔はただ、正直に答えたのが恥ずかしく顔をしかめただけで、館林が自分を疑っているかどうかは、仕方がないことだと、割り切っていた。

「でも、刑事さんはこれを自殺ではないと考えていらっしゃるんですよね」

洋輔がそう口にした途端に、館林は穏やかな表情を崩し、口を固く結んだ。その表情からは、自分が言い過ぎたことを反省しているようにも見えた。

「そう思える根拠を教えてください」

きつい口調で、洋輔は言った。納得のいく答えが相手から吐き出されるまで、引き下がらない覚悟だった。

「そうですか」

ゆっくりと息を吐き出しながら館林は言って、後ろの出入り口のほうをちらちらと気にしだした。誰か来るのを警戒しているのだろう。

「あなたのおっしゃる通り、私は自殺ではないと考えています。自殺と見せかけた、他殺だと」

洋輔の目をしっかりと見つめ、館林は小声で答えた。

「分かりました。お話します」

いよいよ教えてくれるのかと期待を抱いたが、館林の鋭い目つきが突き刺さり、洋輔は一旦落ち着いた。

「ただし、条件があります」

「条件？」

「ええ。ただでは教えられません」

刑事が大学生に何を求めるのだろうか、少々不信感を抱いて洋

輔は耳を傾けた。

「これ以上のことを教える代わりに、あなたには私の捜査に協力していただきます」

洋輔は耳を疑った。

「この事件は、捜査は事実上打ち切られています。何故なら、自殺だと断定されたからです」

状況的に見て、それが妥当な考えであることは素人にも分かる。

この男以外、皆自殺だと考え、疑っていないはずだ。

なら何故、この男は他殺にこだわるのだろうか。洋輔は、疑問に思った。

「自殺だと断定された理由は、遺書があったからなんです」

「遺書？」

「ええ。彼の学ランの、内ポケットの中に」

それは、自殺を決定付ける十分な証拠だった。

「遺書が残されていたんじゃ、自殺じゃないですか？」

もっともな意見を言ったつもりだったが、それに対しての反論を館林は用意してきたみたいだった。

「遺書は全てワープロ書きでした。つまり、誰でも用意できるということです」

ワープロであれば、本人が書いたかどうか確かめることが出来ず、誰でも簡単に用意することが出来る。館林が自殺だと考えていない理由の一つは、それだった。わざわざ遺書をワープロで書くのはおかしい。

洋輔の思考回路に、『他殺』という二文字が加わえられた。

「それともう一つ、あるんです」
洋輔は、言葉を待った。

「仮に、遺書は本人が作成したものとしましょう。けど、文面が納得いかないんです」

「文面、ですか」

「はい」

館林の自信満々な口調に、洋輔は期待を抱かずにはいられなかった。

「彼は、宝徳学園一の秀才なんです。十年ぶりに、宝徳学園が特待生として彼を迎えたわけですから。テストでは、常に学年トップ。全国模試の順位も、上位をキープしています。もちろん成績もトップですから、進路は選り放題です」

自殺した姫島がいかに優秀だったかということを言い終え、館林は手帳に目を落とし、遺書の文面を読み上げた。

「もう限界です。受験のプレッシャーに押しつぶされました。僕は、自分の身を投げます——と、遺書に書かれていました」

ここまで聞くと、館林が主張する他殺説にも共感できた。

確かに妙な話だ。成績が常にトップであれば、指定校推薦などで大学は選り放題のはずだ。一般入試を受けるにしても、姫島の学力をもってすればどの大学も問題はないはず。姫島に、自殺する動機はないということになる。

だが、そう決め付けるのはまだ早い。これらはあくまで、館林や洋輔の推測だ。姫島は、本当に受験のプレッシャーを感じていたのかもしれない。そうなってくると、他殺説は通用しなくなってくる。「もちろん、これだけで断定は出来ませんが、十分可能性はあるのではないかと、私は考えております」

館林の自身溢れる口調に心を動かされ、いつしか洋輔は尊敬の眼差しを向けていた。

「一応、姫島君のクラスメイトに彼の人物像を聞いたところ、とくに情報を得られませんでした。やはり、宝徳学園の生徒はお互い干渉しあわないみたいです」

彼らは、勉強しか興味がないのだ。学年トップが消えたことで、喜んでいる者もいるかもしれない。洋輔は宝徳学園の生徒を、心の底から軽蔑していた。

あいつらは異常だよ——。

現場付近にいた者たちが食堂に集められ待機していた時、誰も、

何事もなかったかのようにペンを走らせている光景は、異様だった。目を背けたくなった。

そんな中、佳代は、一人端のほうで自殺した生徒のことを思い、泣いていた。それを思い出すと、怒りを通り越して悔しさがこみ上げてくる。

「あなたの気持ち、お察します」

慰める口調で館林は言うと、元氣付けるように洋輔の背中を二三度、軽く叩いた。その優しさが、洋輔の感情を高ぶらせた。

「こう言うと保護者の方から怒られると思いますが、勉強ばかりする彼らは異常です。受験戦争に生き残るため、姫島君を殺害した可能性も否めない」

言い終えた館林に、洋輔は顔を向けた。

その時一瞬だけ、館林は偽善的な微笑を浮かべたが、洋輔は気づかなかった。館林は味方であるという認識が、それを見過ごした。「最後に一つ。他殺の可能性があるとすれば、これが重要な鍵となつてきます」

一層、館林の口調に力が込められた。

「死体解剖の結果、姫島君の体内から微量の薬物が発見されました」
「姫島君は、薬物中毒者だったということですか？」

「いえ、そういうわけではないと思います」

即座に否定すると、再び手帳に目を落としてメモを読み上げた。

「彼の体内から発見されたのは、微量の薬です。覚せい剤の類でないということは、検査で証明されています」

「じゃあ一体、何の薬なんですか？」

「それが分かれば、苦労しないんですけどね」

ため息交じりに発したその言葉は、洋輔を失望させた。その薬が、この事件の鍵を握っているというのは、過言でもないようだった。

「念のため、彼の身を引き取った親戚に話を聞いたところ、通院はしていないそうです」

「医者から処方された薬ではないということですか」

「そういうことになりますね」

洋輔の中で、ますます他殺の線が濃厚となってきたが、ふと疑問がよぎった。

怪しい材料は十分存在するのに、何故館林以外の刑事はこれを自殺だと断定したのだろうか。

「他の刑事たちは、神経を麻痺させる何らかの薬だと解釈したみたいですよ」

館林は、洋輔の疑問を見透かした上で答えた。

「自殺する前は、誰でも怖いんです。その怖さを紛らわすために、神経を麻痺させる薬を飲んだと決め付け、他の刑事たちは片付けてしまいました」

「けどそれって、なんだかこじつけみたいな感じがします」

納得がいかない。怪しいものがあれば、それを徹底的に追求するのが警察だろうという考えが、洋輔の中にはあった。

「警察という組織は、そういうものです。よほどの証拠がない限り、動こうとはしません。せめて、薬さえ分かれば事態は大きく変わるんですけどね」

「どうしても、薬の種類は分からないんですか？」

半ば警察を責めるような気持ちで訊いたが、館林はただ黙ってうなだれるだけだった。その反応を見て、洋輔は深いため息をつき、窓の外へ目をやった。

沈黙がしばし病室を支配したが、やがて館林は口を開いた。

「言い訳のように聞こえるかもしれませんが、体内から発見された薬が微量だったせいもあるのです」

洋輔はまだ、窓のほうへ目を向けている。それでも、館林は続けた。

「それと、その薬が見たことのあるものであったら、たとえ微量でも正体をつかめたはずなのです」

ようやく興味を示し、洋輔は振り向いた。

「どういふことですか？」

「言葉の通り、見たことのない薬なのです。もう少し量が多ければ、どのような効力をもつ薬か、ある程度の調べはついたのでしょうか」
見たこともない薬というのは、一体どういうことなのか。重要視せねばならない問題だった。

「死体解剖した解剖医の話によると、患者に与えるような薬ではないとのことですよ」

すでに頭は混乱を極めていた。何故そのような薬が姫島の体内から検出されたのか。自ら服用したとは考えられない。犯人はその薬を飲ませ、姫島が十分弱ったところで屋上から投げたのか――。

「それ以外にも、興味深い話があるんです」
身を乗り出して、館林は言ってきた。

「姫島君の右腕に、痣を見つけたそうです」
「痣？」

洋輔は聞き返した。

「ええ。他の部分はほとんど壊滅状態だったんですが、右腕はまだましな状態が残っていたそうで。その右腕に、痣が浮き出ていたみたいなんです」

「けど、転んで打ったとかじゃないんですか？」

「調べた限りでは、出来てまだ時間が経過していない痣なんだそうです」

力強く言う館林に圧倒されながらも、洋輔は反論した。

「その痣は、きっと関係ないんですよ」

「そうかもしれないし、事件の謎を解く重要なヒントになる可能性もある」

適当に頷き、洋輔は流した。どう考えても、痣が関係あるとは思えないのだ。逆に、痣をキーワードに加えて事件の推理を展開すると、そればかりにとらわれて、答えに辿り着けない気が洋輔はしていた。

「姫島君の体内から見つかった薬が睡眠薬の類だとして、犯人は暴行を加え、それを無理やり飲ませて屋上から落としたというのではあ

れば、一応は納得できます」

館林の推理を、洋輔は冷めた気持ちで聞いていた。

とにかく今、重要視せねばならないのは姫島の体内から発見された微量の薬の正体だった。いくら薬についての仮説を提示しても、薬の正体が分からなければ仮説のまま終わってしまう。何とか薬の正体突き止めることが、課題のようだった。

「とりあえず、今までの話を整理すると……」

一通り情報を得たところで、洋輔は一旦これまでの話をまとめることにした。

「死んだのは、宝徳学園の三年生、姫島良助。日時は十月二十日の午後四時二十分ごろ。屋上から飛び降りたと。屋上には遺書が残されていた」

遺書の内容を忘れてしまった洋輔は、隣で耳を傾けている館林に一瞥をくれた。察して、館林は手帳に目を落とし、内容を読み上げた。

「もう限界です。受験のプレッシャーに潰されました。僕は自分の身を投げます——そう書いてありましたが、ワープロ作成なので偽造可能です」

「はい。ここで、他殺の可能性も視野に入ってきます」

言い終えると、洋輔は間を置いてから続きを話し始めた。

「けど、彼は学園一の秀才です。宝徳学園は指定校だったたくさんありますし、大学は選り放題なのです。一般入試を受けるにしても、敵なしでしょう。彼が受験という動機で自殺するとは、考えにくい。さらに、他殺説を匂わせるのが、姫島君の体内から見つかった薬です。けど、その薬の正体は分かっておらず、いくつかの想像は出来ませんが、言い始めたらきりがありません」

言い切って、館林の反応を窺った。

「大丈夫です。間違っていないですよ」

険しい表情を浮かべ、館林は言った。

「けど、ここからが問題ですね」

洋輔は腕を組んで、言った。

この事件の概要を言葉にしていくうちに、これからやろうとしていることがいかに困難か、洋輔は改めて痛感させられた。入り口すら、見えていない状態なのだ。

他殺だとしたら、彼を殺したのは学校関係者でほぼ間違いない。宝徳学園のセキュリティは厳しかったため、一般人が校内に入って、姫島を殺すことは不可能に近いと断言していいだろう。

学校関係者の中で、姫島を殺す動機を持つものは、何人か――いや、大勢いるはずだ。

洋輔がそう考える理由は、生徒たちの、異常なまでの勉強に対する執着心を見せ付けられたからであった。

校内で生徒が自殺したというのに、時間が経ったら何事もなかったかのように勉強を再開したやつらだ。勉強に命をかけているといっても過言ではない。

いい大学に進むため、またはテストの順位を上げるために、学年トップである姫島を殺害しようとする者は、いるのではないだろうか。

発想が飛躍しすぎているかもしれないが、しかしあながち的外れではない気がしていた。ここまでくると端から見ればただの偏見だったか、洋輔は自分の考えに自信を持っていた。

そしてこの考えは、おそらく館林も共感してくれるだろうという確信も抱いていた。

「私は、これが本当に他殺だとしたら犯人を許せません」

唐突に、館林は胸中の思いを口にした。

「この三日間、私は色々と調べてきました。宝徳学園について、姫島君について、周りの生徒たちについて。得られたものはたくさんありました。そして、私なりの推理も出来上がりつつあります」

その言葉に、洋輔の期待はいっそう膨れ上がる。

「この推理が正しければ、解決の糸口が見えてきます」

館林は笑みを浮かべ、つられて洋輔も明るい気分になった。

刹那、脳裏にある違和感がよぎり、洋輔を困惑させた。

なんだろう、このもやもやした気持ちは。

表情は笑顔を浮かべまま、洋輔は今までのことを振り返り、必死に思考を巡らせた。

洋輔の脳裏によぎった違和感は、姫島の自殺に対しての、館林の必死さであった。

館林曰く、他の刑事たちはこの事件を自殺と断定しているらしいが、館林は他殺だと言い張り、大学生の洋輔に捜査協力を求めている。何故そこまで必死になれるのだろうか。

姫島良助の死は、不明な点がいくつかあるにしろ状況的にはほぼ自殺だと考えられる。彼の学ランの内ポケットには遺書が入っていた。ワープロで書かれていたが、深く考えることもない。館林の同僚たちも、これは自殺だと考えて、疑っていない。

それでも館林は他殺だと考え、一人で捜査をしようとしている。今日、洋輔に会うため、一人でこの病院を訪れたのが、固い決意の現れであった。

これら三つの違和感は、余計に洋輔を混乱に陥れた。思考能力は著しく低下していき、どちらの説が正しいのかもはや判断がつかないほどになっていった。

そして次第に、洋輔は信頼していた人物へ疑惑の目を向けていた。「どうしました？」

それを察した館林は、怪訝な表情を浮かべそう口にした。

「いや、べつに」

慌てて平静を装い、その場は何かごまかしたが、このままではいけないという危惧が、洋輔の中にはあった。

何か館林は重要なことを隠している——根拠はないが、洋輔はそう考えていた。

その考えが脳裏にあるから、洋輔は館林のことを百パーセント信用することができなかった。洋輔の思い違いで、隠し事などではないかもしれない。が、洋輔の直感はかなり確率で当たるのだ。

「だから今回も、自分を信じてみる。」

館林はきつと、隠し事をしていると。

「私は、姫島君を殺した犯人を絶対に許さない」

少なくとも、その口調には偽りはなかった。それが、洋輔をさらに困惑させた。

「姫島君の輝かしい将来を奪った犯人が、憎いです」

どうしてそこまで感情移入ができるのか、洋輔は解せなかった。

姫島と館林には、なんらかの接点があるというのか。

もしかしたらそれが、館林の隠し事なのかもしれない。

姫島の小さい頃から親交があったとしたら、真剣になれるのも頷ける。館林がそのことを隠している理由は、刑事としての自覚からであろう。私情に流されて捜査するということは、刑事として失格だ。故に隠している。同僚たちにも黙っている。洋輔は、そう解釈した。

「この事件を解決するために、私は恥を忍んでこの病室を訪れました。姫路君を殺した犯人を、どうしても捕まえたいのです」

プライドを捨て、たかが大学生に必死に訴える姿は、洋輔の心を動かした。そして、自分を協力者に選んでくれた館林に感謝さえしていた。さきほど抱いていた、館林に対しての疑惑は、徐々に頭の片隅へと追いやられていった。

「分かりました。一緒に、捜査をしましょう」

館林の手を取り、洋輔は言った。

「本当ですか？」

期待通りの答えを得られて、館林は満面の笑みを浮かべた。

最初こそあまり乗り気ではなかったが、話していくうちに、館林のことがもつと知りたくなり、この事件に隠された真実も見てみたくなった。

姫島が自殺ではなく他殺だとしたら、犯人は誰なのか。その動機は、一体何なのか。他にも、洋輔の興味を駆り立てる謎が山ほどあった。館林とともに、全ての謎を明らかにしたいという強い気持ち

が、洋輔にはあった。

「大丈夫です。きっと、上手くいけます」

自分に言い聞かせるように、館林は言った。心のどこかで、館林も不安を抱えているのだろう。

「少し聞きたいことがあるんです」

これから館林と事件の捜査を行う上で、重要なことを洋輔は忘れていた。

「僕、教育実習生として宝徳学園に来たのですけれど、一体どうなるんでしょうか？」

自殺騒動が起き、学校はおそらく休校だろう。洋輔も、大学へ呼び戻されるに違いない。そうなった場合、捜査を行うのに支障をきたす。館林がどのように考えているのか、洋輔は知りたかった。

「そのことでしたら、大丈夫です」
考えはあるようだった。

「私がこれからあなたの大学と掛け合います。大学側も、了承してくれるでしょう」

「仮に了承してくれても、宝徳学園はどうなるんですか？ 休校でしょう」

「ええ」

即答なのに若干戸惑いつつ、洋輔は訊いた。

「だったら、捜査も何もないじゃないですか。どうやって、進めるんです？」

その質問の答えも予め用意していたらしく、返答に窮することなく館林は答えた。

「休校はあと四日で解かれます。それから、生徒などに話を聞くなどして、捜査を始めましょう」

館林の力強い口調により、洋輔は頷かざるを得なかった。

「一人の生徒が自殺したというのに、たった一週間だけ休校というのも、おかしい話ですよ」

急に声のトーンを落とし、深刻な顔つきで言った館林の姿は、ど

こか悲しげな様子だった。

姫島と小さな頃から親交があったという洋輔の解釈が正しければ、そのような姿も当てはまるのだろうか、想像と若干のずれが生じていることに、引っ掛かりを覚えた。

だが、そのずれを洋輔は上手く言葉にすることができなかった。「これを」

不意に館林が渡してきたのは、名刺だった。館林の肩書きと携帯番号、メールアドレスが書かれていた。

「あなたの携帯番号を、教えていただけますか？」

「あ、はい」

洋輔は記憶を頼りに、近くにあった紙に携帯番号を書き、それを館林に渡した。

満足そうに受け取ると、館林は立ち上がり、言った。

「今日中にでも、あなたの大学へ電話をかけてみます。内容は、教育実習を続けさせてくれないだろうか、というものです。おそらく快諾していただけるでしょう」

自信に満ち溢れた言い方だった。この物怖じしない性格が、周りの人たちに好感を抱かせる。洋輔も、その内の一人だった。

「瀬郷さんの担当医師の話では、明日ぐらいには退院できるそうなので、大学側と話した内容については明日の夜ぐらいに、報告させていただきます」

退院できるという話は初耳だったが、気になっていたことは確かだったので知れたのは嬉しかった。

「分かりました。ありがとうございます」

深く頭を下げ、洋輔は感謝の意を示した。

それを見た館林も一礼をして病室を出て行った。

病室に沈黙が訪れ、途端に寂しさが募ってきた。館林を慕っている証拠だった。

一時は疑いも向けていたが、この短時間でよく館林を信頼できるようになったと、洋輔は不思議に思っていた。意外と人見知りのと

ころもあるのだ。

心を開きかけている自分に戸惑いを感じていたが、その反面、嬉しさもあった。館林という人物に出会えた事で、何か変われることが出来るかもしれないという期待を抱いていた。これから館林とは、徐々に心から信頼できる仲になりたいという願望が、洋輔の心に渦巻いていた。

「よし、がんばるか」

病院のベッドの上で、洋輔は気合を入れた。これから忙しくなることを覚悟し、横になって休息をとることにした。

時刻は午後の三時半をようやく回ったところで、まだ睡魔はなかったがそれでも寝なくてはいけないという強迫観念が洋輔を襲った。絶対に犯人を見つけ出してみせる――心の中で、固く誓っていた。もうすでに、洋輔はこの事件を他殺だと思い込み疑わなかった。

だが洋輔は、まだ知らなかった。

自分が挑もうとしている事件に隠された、恐るべき真実を――。

第六章

翌日、洋輔は無事退院することが出来、早々に自宅のアパートへ帰宅した。館林からの電話をいつでも受けられるようにするためだ。洋輔が住むアパートは築五十年の、木造建てだった。家賃は、都内の平均を大きく下回るものだったが、親の仕送りとバイトで稼いだお金でも、必要最低限の生活を送るのがやっとというのが現状だった。

大学生になったら一人暮らしをしようと、高校三年の頃に漠然と抱いた。一月に入り、そのことを両親に告白すると、両親はとくに何も言わず、頷いた。それが何を意味するのか、想像にあまりある。中学二年生の頃に起こしてしまった傷害事件がきっかけで、両親との折り合いが悪くなってしまった。何度も謝り、どうにか穏便に事は済んだものの、傷害事件を起こしたという事実は拭いきれない。家の中でも不穏な空気が漂い始め、家族で交わされる言葉数も次第に少なくなっていくた。

両親は、洋輔に家を出て行って欲しかったのだ。それをいち早く察した洋輔は、自ら申し出た。両親にとっては、願ってもないことだった。

自らの愚かさが招いた、結果だった。傷害事件さえ起こさなければ、もう少しよい方向へ進めていたかもしれない。

あの日から何度、後悔しただろう。自分の軽率な行動を呪った。しかし、いくら後悔しても相手にその気持ちは上手く伝わらず、残酷に時間だけが過ぎ去っていき、今の洋輔があった。

アパートに帰るたび、過去を振り返ってしまう自分を自嘲気味に笑って、テレビの上にあるデジタル時計に目をやった。時刻は正午をようやく回ったところだった。洋輔は落胆した。帰ってきてからまだ十分も経っていない。

館林の電話が待ち遠しい。大学側の対応が気になるところだった。その対応により、これから館林と捜査できるのかどうかが決まるのだ。ここまで来たら、なんとしても事件の真相を導き出したかった。部屋の中央に胡坐をかき、目の前に携帯を置いて、電話がかかってくるのをひたすら待つというのは、忍耐力のない洋輔にとっては酷なものだった。しかし、それ以外にやることが思いつかなかった。勉強する気も起きないし、食欲もない。事件のことが頭から離れず、洋輔を苦しめていた。

携帯を見つめて待つこと一時間、洋輔にとっては何時間も経った気がしたが、部屋中に大音量の着信が鳴り響き、洋輔は歓喜に満ち溢れた。思わず声が出てしまったほどだった。

「もしもし」

震える手で携帯を取り、通話ボタンを押して耳に画面を押し当てて言った。

「館林です」

通話口から、待ちに待った館林の声が聞こえてきた。洋輔は若干の安堵感を覚えた。

「ずっと待っていましたよ」

喜びのあまりそう口になると、館林の笑う声が聞こえてきた。

「昨日の夜、大学側と交渉した結果、あなたを宝徳学園の教育実習生としてまだ使ってもいいそうです」

「本当ですか？」

「ええ。宝徳学園側も、渋々ですが了承してくれました」

今のところ、計画は順調に進んでいるようだった。

「じゃあ、問題ないですね」

うきうきした口調で言うと、館林は唐突に黙した。何かまずいことでも言ったのだろうか、洋輔は不安に駆られた。捜査を始めようと張り切った矢先に、仲間割れでも起こったらたまったものじゃない。

しばらく嫌な沈黙が二人の間に流れたが、やがて館林は言った。

「言い忘れていましたが、私はあなたと捜査をすることはできません」

その意味を理解するのに、時間を要した。

「それって、どういう意味ですか」

怒気を含めた口調で洋輔が言うと、館林は声を低くして事情を説明しだした。

「自殺と断定された事件を独自に捜査することは、同僚たちの輦蹙をかうことになります。ですので、しばらくはあなた一人で捜査を進めてください」

「は？」

あまりにも自分勝手な発言に、洋輔は憤りを感じた。

「ちよつと、待ってくださいよ。僕一人じゃ、捜査なんてできませんよ」

興味本位に協力を承諾した自分の愚かさを、今更嘆いた。館林はおそらく、初めからこうするつもりであっただろうと推察される。

教育実習生として来ている洋輔だから、館林は協力を依頼した。刑事だと、どうしても警戒されてしまうが、教育実習生の洋輔であれば怪しまれることなく校内を回れるし、生徒や教師からも話を聞くことができる。

つまり洋輔は、館林に上手く利用されているだけだったのだ。丁度いたから、選ばれただけであつた。

悔しさと恥ずかしさが、洋輔の心に渦巻いた。

「どうされました？」

優しく言う館林の口調は、全てを察した洋輔には腹立たしく感じたが、その怒りを何とか自制して、口を開いた。

「分かりました。一人で謎を突き止めます」

よく言えたと、自分で自分を褒めたくなる。いいように利用する館林のことはまだ許せていないが、それでも一度乗った話だ。それに、これが本当に他殺だとしたら、誰が犯人なのか知りたいという好奇心もある。利用されていると気づきながらも、捜査に誘っ

てくれた館林に少なからず感謝はしていた。

「すいません。皆の目を盗んで、なるべく合流できるようがんばりますので」

携帯越しでも、館林の誠意ある口調は伝わってきた。

「必ず、姫島君の死の真相を説明しましょう」

上手いように乗っつけられた感是否めないが、一応納得した。館林が、一番捜査をしたいはずである。そう思うと、一人でも何とか頑張ってみようという気が起きる。相手が館林だからかもしれないが。「それでは、また連絡しますので。瀬郷さんも、何か分かったら逐一報告してください。出られない時もありますが、なるべく出られるようにしますので」

洋輔は頷いて通話ボタンを切り、勉強机に向かった。これからの捜査をする上で、重要なことを紙に記しておこうと思い立ったのだ。ルーズリーフを取り出し、手元のスタンドライトを点け、思考を巡らせながらペンを走らせる。次々と書きたいことが脳裏に思い浮かぶので、しばらくペンが止まることはなかった。

「大体、こんなところか」

ルーズリーフ三枚を使った充実感に、洋輔は満たされていた。三枚とも、小さな文字がぎっしりと詰まっている。せっかく書き上げたのに、読み返そうという気は起こらなかった。それでも、洋輔は十分満足していた。

この事件の詳細を綴ったのは、どこか忘れている箇所がないかどうかを確認する、一種の作業みたいなものだった。書いている最中にペンが止まることはなかったため、洋輔は安堵していた。

安心して捜査に臨める――胸中で呟き、洋輔はスタンドライトの光を消してベッドを移動し、横たわった。

あと三日で宝徳学園の休校が解かれる。そしたら洋輔は宝徳学園へ戻り、教育実習生として授業を教える傍ら、姫島良助が何故死ぬことになったのかという捜査も進めなければならない。

自分にそんな器用なことができるのかという不安はあった。先ほ

どの電話で強がって見せたものの、この事件の謎に辿り着いた自分の姿を想像することはできなかった。

一人だと気持ちが悪くなり、どうしてもネガティブな方向へ考えってしまうのが、洋輔の悩みの種でもあった。

「はあ」

思わずため息をついて、ゆっくりと瞼を閉じた。

時刻は昼の二時を示していたが、唐突に睡魔が襲ってきたのと、何もやることがないというのが手伝って、洋輔は眠りに落ちた。

目が覚めた洋輔はおもむろに起き上がると、窓のほうへ視線を向けた。外は、暗闇に包まれている。目覚まし時計に目をやった。深夜の一時を回っていた。

「最近、寝すぎかな」

自嘲気味に呟いて、洋輔はベッドを降りて洗面所へ向かった。

水道の蛇口をひねり、コップに水を並々すすいで一気に飲み干した。喉が潤い、思考能力も徐々にはっきりしてくると、事件とは関係ない、ある疑問が不意に脳裏を掠めた。

俺が倒れた原因って、一体なんだったんだ――。

事件のあった日、現場近くにいた洋輔たちは事情徴収のため食堂へ集められ、最中に洋輔は倒れた。その後、病院へと運ばれたようだったが、周りの証言によると目を覚まして暴れたという。しかし、その時の記憶が当の洋輔には全くなかったのだ。医師は、暴れた原因は分からないという。事件とは全く関係ないだろうが、原因を突き止めたかった。

両腕に目を落とす。見る度、吐き気を催す。原因が全く分からないという、気味の悪さからだった。

あの日、自分に何があったのか――記憶を遡る必要があった。

朝起きて、普通に朝食を食べ、意気揚々と宝徳学園へ向かった。そして教室の後ろで授業を見学し、昼食は食堂で摂って、午後も授業を見学。放課後になり、図書室で勉強していた最中に、肉の潰れ

たような音を聞いて、飛び出した。

肉の潰れた音の正体は、姫島が飛び降りて地面に衝突した際の音だった。初めて死体を見た洋輔は気分が悪くなり、昼に出会った佳代に連れられて保健室へ向かった。

養護教諭の松平は、気分が悪いと訴える洋輔に吐き気を抑制する薬を勧めた。市販といえども、やはり他人から渡された薬を服用することは躊躇われたが、せっかくの厚意を無下にすることはできず、飲んでおいた。

その後、現場付近にいた者たちは食堂へと集められた。当然、佳代や洋輔も食堂に待機させられた。

待機している間、急に気分が悪くなったことは明瞭に覚えている。学園の生徒が自殺したのに、平気な顔で勉強をしている生徒たちを見て気分が悪くなったのか、刑事たちの事情徴収を受けることへのプレッシャーが強くて気分が悪くなったのか――それとも、松平から受け取った薬で、気分が悪くなったのか。

可能性として挙げられるものは、おそらくこの三つだろう。このどれかが、洋輔の気分を著しく悪くした。

一番可能性があるのはどれか、洋輔にはある程度の見当がついていた。

松平から受け取った薬である。

他人から受け取った薬は服用すると、先生や親に昔から言われていた。他人が服用している薬は、自分に合っていない場合があるからだ。つまり、松平の服用している薬が、洋輔には合わなかったという可能性だった。

しかし、どうしても腑に落ちない点があった。薬が合わなかったというだけで、高熱を出して倒れたり、無意識のうちに暴れたりするだろうか。

松平用に医師が処方した薬なら、百歩譲って納得することが出来る。けど、市販の薬で、いくら合わないからといってそのような症状が出るとは考えにくい。その薬を、洋輔は吐き気を止めるため過

去に飲んだことがあるかもしれないからだ。

だとしたら、松平が洋輔にあげたのは処方された薬だったということか。

いや、それはない。松平は養護教諭だ。薬の知識は長けている。危険だということくらい、誰よりも承知しているはずである。

だとしたらわざと、危険となる薬を渡して飲ませたのか……。

一瞬、その考えが頭をよぎったが、すぐに否定した。

松平とは初対面で、洋輔を陥れる動機やメリットなどないのだ。

それに、故意にやったことがばれてしまったら、何らかの罪に問われる危険性だってある。

考えれば考えるほど、謎は深まるばかりであつたが、ある決意が洋輔の心の中に芽生えていた。

休校が解けて学校へ行くことになる二日後、松平のもとを訪ねてみよう――。

そうすることによって、何か分かるであろうと洋輔は踏んでいる。少し寄り道することになるが、館林の監視があるわけでもないの
で、捜査はゆっくり進めていくことにした。

とりあえず二日後、学校へ行ったときに考えればいい。こんなアパートで一人、推理を巡らせても確認のしようがない。

洋輔は踵を返して再び、ベッドに横たわった。

目は完全に冴えているので眠ることは出来ず、気づけば窓の外は明るくなっていた。

第七章

「あ、瀬郷君」

午前七時、職員室へ入ると三学年主任の橋本に名前を呼ばれた。

「はい」

駆け足で橋本のデスクのほうへ向かう。橋本の表情は、初対面の時よりも心なしか、幾分暗かった。やはり、あの自殺騒動の件が重くのしかかっているのだろうか。

「君、大学の方は大丈夫なのかね？」

「まあ、はい」

橋本の口調には、生気が感じられなかった。自殺した姫島が三年で、しかも受験が理由ということであつたから、マスコミの、三学年主任に対してのバッシングも相当なものであつたと予想される。気の毒に思えてきた。

「どうしても教育実習を続けたいというのなら構わないが、帰っても大丈夫なんだよ」

言葉とは裏腹に、口調には帰ってほしいというニュアンスが露骨に込められていた。それを察した洋輔は、反抗的な態度をとつた。

「いやです。ここで一ヶ月、教育実習を続けさせてもらいます」

橋本がため息を吐いたのは不愉快だったが、敵を作るわけにもいかず、ここはぐっと堪えた。

「失礼します」

一礼すると、自分のあてられたデスクに座った。

周囲の視線がやや冷たいのは、覚悟していたことだ。それでもむしろ、感謝しているぐらいだ。追いつ返るのが普通の対応だと思う。洋輔には、なんとしてもここに留まらなくてはいけない理由があった。姫島の死の真相を突き止めるためだ。

暇な時を見て捜査に合流するといった館林を信じ、洋輔は独自に調べることを決意していた。

その前に、保健室の松平のもとを訪れなければいけない。体調が悪化したのは、松平がくれた薬に原因があると洋輔は考えていた。保健室に行けば、何かしら分かるかもしれない。保健室を訪ねるつもりである。

「瀬郷君」

呼ばれて振り返ると、三学年に世界史を教えている山下が教科書を片手に立っていた。

「準備のほうは順調かい？」

長身で体格もよく、端正な顔立ちをしているのだが、感情のない瞳と、抑揚のない山下特有の喋り方は、冷たい印象を与えた。

洋輔は山下が苦手だったが、一ヶ月お世話になる先生なので好みのことなど言っていられない。嫌われないようにと、心がけていた。「ええ、一応計画は立てたんですけど」

言って、洋輔は授業内容を書き込んだ大学ノートを開いて見せた。腰をかがめ、大学ノートを覗き込みながら山下は言った。

「まあ、君の学力であれば問題ないだろう」

そう言われても、洋輔は安心できないでいた。この程度の授業じゃ、彼らはきつと満足してくれないだろう。

しかし、これが洋輔の限界でもあった。もう少し、実力に見合った高校に行かせてくれれば深刻に悩むこともなかったのにと、思っていた。しかし、この学校に教育実習生としてきていなければ姫島の死の真相を捜査することができなかったわけで、複雑な心境を抱えていた。

憂鬱な気分に陥って、徹夜で書いたノートを見返していると、不意に胸ポケットが震えた。マナーモードにしている携帯に、着信が入ったのだ。

携帯を取り出して開くと、画面に館林刑事と表示されていた。

焦る気持ちを押さえ席を立ち、職員室を出て携帯に出た。

「もしもし」

自然と声が小さくなるのは仕方なかった。刑事と、姫島の事件の

ことで接触していることが回りに知られたら、大問題だ。

「やあ、瀬郷さん」

館林の声は、妙に明るかった。

「どうですか？ 順調ですか？」

「まだ学校始まったばかりですから」

苦笑して、洋輔は答えた。

「そうですね。一応、電話してみただけです」

洋輔には、館林の気持ちが痛いほど分かった。

姫島の死の真相を誰よりも明らかにしたいと思っているのに、現場に行って捜査をすることができないもどかしさが、館林にはあるはずだった。職場で、館林はどんな気持ちで洋輔の報告を待ち望んでいるのだろうか。

「マスコミもこの事件を自殺と断定して相手にしていませんが、我々でそんな連中を見返してやりましょうよ」

意気込む館林に、洋輔は少し励まされた。

この事件が起きた翌日、マスコミは飛びつき、テレビの報道番組もそればかりを話題に取り上げた。何せ、都内屈指の進学校の生徒が、受験を苦に自殺したのだ。当然、話題の種にされる。しかし、宝徳学園の校長はイメージダウンを危惧し、あらゆるところへ手を回してマスコミの報道を、数日後には沈静化させた。世間の反応も、今では冷めたものだった。姫島の自殺について特に突っ込んだことは報道されなかったのだ、世間もただ自殺と断定された事件に、それ以上の興味が湧くことはなかったのかもしれない。

洋輔は、悔しさがこみ上げてきた。他殺かもしれないのに、誰も再捜査してくれないなんて。今頃犯人は、悠々と生活をしているのだろう。安全圏に逃げたとでも思っているのだろうか。

許せなかった。必ずこの手で犯人を暴いてみせる。

「分かったことがあったら、報告させていただきます」

「そうですか」

携帯越しに、何度も満足そうに頷く館林の姿が想像できて、洋輔

は噴き出しそうになった。

「こっちは心配しないでください。なんとかやってみせますから。では」

館林の返事を待たず携帯を切ったのは、そろそろ職員会議が始まるという合図の鐘が校内に鳴り響いたからだだった。

急いで職員室へ戻ると、すでに他の教職員たちは自分の席についていた。その光景を見て、洋輔は後ろめたさを抱いた。

「これで全員、そろいましたね」

教頭のデスクの前に立つ校長が、露骨に非難を込めた口調で言ったのが、洋輔の心に深く突き刺さった。やはり自分はお邪魔なのだと、痛感させられた。

「今から、職員会議を始めます」

校長の報告から始まり、他の先生たちも今日のことについて話し終え、予定していた時間より十五分早く会議は終わった。

「えー、時間も余ったことですし、少々これからのお話についてさせていただきたいと思います」

若干、職員室に漂う空気の色が変わったことを、洋輔は察知した。皆が固唾を吞んで注目している中、校長は躊躇いがちな表情を浮かべながら口を開いた。

「まずは、瀬郷君のことなのですが」

一斉に、教職員たちは洋輔に視線を向けた。

いくつもの目が自分に向けられていることに当惑しつつも、それを受け止めて、洋輔は校長を直視した。

「姫島君が自殺した日、捜査に参加した館林刑事が私に、電話で頼んでくれました。瀬郷君の教育実習を、この事件をきっかけに止めさせないでくれと。私は彼を外すつもりはありません。それはあくまで彼の意味です。彼が止めたいと言えば、もちろん止めても結構ですし、続けたいというのなら、続けても構いません」

皆が、洋輔の反応を窺っていた。見守られている中、洋輔は周りのプレッシャーに押しつぶされることなく、頷いてみせた。

「というわけで、彼は一ヶ月間、ここで教育実習を続けることになります」

歓迎ムードでないことは、一目瞭然だった。何人か、落胆の表情を浮かべている者もいた。

自分がお邪魔だというのは、とうに自覚している。それを覚悟した上で、教育実習を続けるのだ。

全ては、謎を解き明かすために。

「では次に、マスコミへの対応についてですが」

全員が、校長へ向き直る。

「姫島君の自殺は、大々的に取り上げられました。取材をされた生徒、先生も数多くいらっしやるでしょう」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、校長は疲れきった口調で言った。校長はもちろん、他の教師、生徒たちもマスコミに追いかけられたのは、容易に想像できた。

佳代もまた、マスコミに捕まったのだろうか。

想像するだけで、胸が締め付けられる思いだった。泣いている佳代の横顔は、どこか愛おしくて、思い出すたびにこの事件の真相を突き止めるという決意が強くなっていった。

「ですが、もうとりあえずは安心です。何とか警察と連携して、事態を收拾することが出来ました」

今やもう、姫島が自殺したということを報道している番組はないに等しかった。やはり宝徳学園の圧力が働いていたのかと、洋輔は思い知った。

「このままじっとしていれば、マスコミに騒がれることもないでしょう。姫島君のためにも、そっとしておきましょう」

一瞬、校長と目があい、洋輔は慌ててそらした。校長の目は、言いながらしっかりと洋輔を見据えていた。

洋輔は、校長の言った言葉が自分に向けられているような気がしてならなかった。

まさか、洋輔が館林と姫島の自殺について捜査をしようとしている

るのを、見抜いているのか。だから、洋輔の目を見て校長はあんなことを言ったのだろうか。

嫌な想像が脳裏を掠めたと同時に、チャイムが鳴った。職員会議の終わりを告げるチャイムだった。このぐらいの時間から、生徒たちは続々と登校してくる。

「それでは、会議を終了いたします」

洋輔は校長に呼び止められないよう、気配を消して職員室を出た。「ふう」

思わずため息を漏らし、気持ちを落ち着かせるためトイレへと駆け込んだ。

しばらく頭の中を整理して、ポケットから携帯を取り出した。

着信履歴を開き、館林のもとへ電話をかける。

迷惑なことは百も承知だが、どうしても今確認を取る必要があった。洋輔は、館林が宝徳学園にわざわざ教育実習のことについて電話を入れたことで、校長に悟られたのではないかと、考えていた。

「もしもし」

意外にも、館林はすぐに出た。

「あ、館林さん」

洋輔のすぐるような口調が携帯越しに伝わったのか、館林は声を低くして言った。

「どうされました？」

館林は、校長に自分たちの計画が悟られたことを自覚していないのか。少し失望した気分で、洋輔は事情を説明した。

「なるほど」

一通り言い終えると、館林は唸った。

「そんなはずはないと思いますけどね」

「でも、校長と目が合ったんです」

「気のせいじゃないですか？」

楽観的な館林に、ますます憤りを覚えた洋輔は、つい反抗口調になってしまった。

「まあまあ、落ち着いてください。仮に我々の思惑がばれていたとしても、要は尻尾を捕まねなければいいのです。だから、捜査は内密にお願いしますよ」

言い合っても仕方ないという理性が働き、ここは引き下がったが、納得したわけではなかった。

校長は、事件を蒸し返されないことを望んでいる。伝統ある宝徳学園の名誉を、これ以上傷つけないために。洋輔たちが、姫島の自殺について捜査しているところを目撃したら、校長がどのような手段に出るか、推測ができた。

洋輔の教育実習は中止になり、大学からも厳重な注意をくらうことになるだろう。館林も、同僚たちから顰蹙をかうことになる。

ばれたら、館林の願いがつかえてしまう。そして、事件は永久に謎のままだ。

そんなことには、させない。

全ては洋輔にかかっていた。館林の言った通り、事を内密に運ばなくてはならない。

「何しているの？」

いつの間にか自分の後ろに、生徒が立っていた。驚くほど冷淡な口調だった。

「うわ！」

動悸が一気に激しくなる。手に持っていた携帯を、危うく落とすところだった。

男子生徒は、宝徳学園の生徒特有の冷たい目をしていた。端正な顔立ちに加え、清潔な身なりをしており、髪も綺麗に揃えていて周りに好印象を与えそうな容姿をしているのだが、人を寄せ付けない雰囲気、存分に漂わせていた。

「ちょっと、邪魔」

言って、男子生徒は前に立っていた洋輔を手で押しのけた。

悪いのは自分だとはっきりと自覚しているが、男子生徒の言い方に腹が立った洋輔は、謝りもせずトイレを出た。

「なんだよ、あいつ」

悪態をつき、腕時計に目を落とした。ホームルームが始まるまで、あと五分。洋輔は一時間目の授業を行うため必要な教材をとり、職員室へ戻った。

第八章

「起立、礼」

ホームルームが終わるのを見届けて、洋輔は三年五組に入った。この教室で、洋輔は一時間目に世界史を教える。これが、初めての授業だった。

「おや、早いね」

担任の渡井は、興味なさそうな口調で言った。

「落ち着かなくて」

言って、洋輔は教室を見渡した。

案の定、ホームルームが終わっても生徒たちは誰一人席を立たず、自習に没頭していた。三年生で受験も近いからというのも影響しているのかもしれないが、他の学年でも生徒同士が喋っている光景を見ることはできないだろう。

しばらく生徒たちを眺めていると、窓際の一番奥の机が空いていることに気づいた。

「あの、先生」

渡井は教室を出て行こうとして呼び止められたので、少々不機嫌そうな表情を浮かべたが、振り向いてくれた。

「あの席、空いていますけど」

「ああ。あれは……」

言いながら、しばらく宙に目を漂わせていたが、どうしても思い出せないらしく、やがて持っている出席簿に目を落とした。

「安東佳代さんだね」

頭に電撃が走った。あの佳代か。

空席ということは、佳代は今日休みなのか。念のため、渡井に問いかけた。

「どうして安東さんは休みなのですか？」

「それが、まだ連絡は入ってないんだよ」

訝しげな表情を見せたので、これ以上佳代の質問をするのは止めておくことにした。

「それじゃあ、がんばってね」

抑揚のない口調で言う、渡井は教室を出て行った。

すると、入れ替わりに洋輔の授業をサポートしてくれる山下が、ゆっくりとした足取りで、不満げな雰囲気醸し出しながら教室に姿を現した。

「今日はよろしくお願いします」

「うん、よろしくね」

手短に挨拶を済ませた後、山下は授業に使う教科書を教壇に荒々しく置き、ため息をついて、隣に立っている緊張気味の洋輔に視線を向けた。

「どう、いけそう？」

「まあ、多分」

曖昧な返答をしたところで、一時間目の始まりを告げるチャイムが校内に鳴り響いた。

自習をしていた生徒たちは一斉にペンを止め、参考書とノートを机にしまい、予め出しておいた世界史の教科書とノートを開いた。

「うわ」

思わず声が出てしまったほどに、四十人の生徒たちのシンクロは見事で、洋輔は普通に感心してしまった。

この光景に見慣れているのか、山下は何も言わず教壇に置いた自分の教科書を持って教室の後方に移動した。サポートといっても、山下の仕事は洋輔の授業を見守ることにあった。

洋輔は喉の渇を覚え、わきの下から汗がにじみ出てくるのを感じ取った。緊張はいよいよピークに達し、頭の中が真っ白になって、これからやろうとしていた授業計画もどこかに飛んでいってしまった。

助けを求める眼差しを、後ろに立っている山下に向けたつもりだったが、とくに何かしてくれるわけでもなかった。

教育実習性がパニックに陥っているのにどうして助けてくれないのだと、胸中で思いつきり非難したが、いい加減授業を始めなきゃと思い、口を開いた。

「教育実習生の、瀬郷洋輔です。この時間は、僕が授業を担当します。一生懸命頑張りますので、よろしくお願いします」

静寂の中、洋輔の意気込みだけが空しく響いた。生徒たちの視線は洋輔に冷たく突き刺さり、早くも心が折れそうな気配がした。

「とりあえず、授業を始めます」

一刻も早く生徒たちの冷たい視線から逃れたくて、洋輔は黒板に体を向けてチョークを握った。

その直後、教室の後ろのドアが勢いよく開かれ、洋輔は慌てて振り返った。

「すみません、遅れました」

謝りながら入ってきたのは、佳代だった。肩で息をし、セツトしていない髪が、急いで学校へ来たのだということを物語っていた。

「遅いぞ、安東」

山下は腕を組み、遅刻してきた佳代を叱責した。他の生徒たちというと、遅刻してきた佳代には目もくれず、じつと洋輔に注目していて、早く授業を始めろという、無言のプレッシャーを放っていた。

察知できていた洋輔だったが、思わず佳代に見とれてしまった。辛いことがあったばかりなのに、遅刻してでも学校へ来た佳代が、愛おしくてしょうがなかった。

「瀬郷君」

いつまでも授業を始めない洋輔を、山下は軽く注意した。

「すみません」

名前を呼ばれたことに気づき、山下に体を向けて浅く頭を下げたが、どうしても佳代のほうへ視線を向けてしまうのは、男としての本能故なのか。

ノートを開き、今日の授業のテーマを生徒たちに向けて発表する

時でさえも、佳代の方を盗み見ていた。

自分の席について、佳代はカバンから世界史の教材一式を取り出した。洋輔はその間、黒板にはチョークを走らせずに、授業内容について軽く説明をした。そんな中、生徒たちはとりあえず授業を進めてほしいという空気を漂わせていた。洋輔はそれを察していながらも、一秒でも長く佳代の顔を視界に入れておきたいという気持ちから、生徒たちに背を向けられないでいた。

それが数十秒続いた頃、洋輔が佳代のほうを盗み見た時、ついに目が合ってしまった。

刹那、動機が激しくなり、すぐに目を逸らした洋輔だったが、罪悪感がこみ上げてきた。

慌てて平静を取り繕うも、無理があった。唐突に、洋輔の様子がおかしくなったことに、生徒たちは不信感を抱き、後方で見守っていた山下は、ある種の危惧を感じていた。

「さあ、それでは、これから黒板に文字を書いていきます」

急に声を張り上げたのは、心の中にある恥ずかしさを紛らわすためだった。顔が上気している。額から汗が止まらない。早くこの場を抜け出したいが、まだ授業は始まったばかりだ。早くも自分が何を発したのか分からなくなった矢先、何かが洋輔の中で引っかかった。

それは今どうでもいいことで、気にかける必要もないのだろうが、そう意識しても頭から離れることはなかった。

「じゃあ、今日は――」

何だ。この引っかかりは――。

黒板にチョークを走らせながら、洋輔は考えていた。

佳代の瞳が、悲しみの色を帯びていることについて。

一週間も経つというのに、佳代はまだ姫島の自殺を引きずっているというのか。

だとすればもう、一つしか考えられない。

姫島と佳代には、何らかの接点があった――。

「瀬郷君」

洋輔はいつの間にかチョークを止め、思索にふけっていた。山下は、訝しげな視線を洋輔に向け注意したが、推理することに夢中ではや注意など耳に入ってこなかった。

姫島と佳代に接点があっても不思議ではない。同じ三年なのだから。しかし、クラスが違う。宝徳学園は学力向上を目指し、担任とクラスは三年間変えないという方針だった。この学園の生徒たちの性格を考えると、佳代と姫島が出会うきっかけはほぼないという結論が必然的に導き出される。

それに、仮に姫島と佳代に接点があったとしても、自殺死体を見て号泣していた時の説明がつかない。佳代はあの死体が姫島のものだと分からなかったはずだ。性別だって、学ランであったから、男だとかろうじて判断できたのだ。それぐらい、凄惨な死体だった。

佳代は、見ず知らずの死体を見て涙を流したというのか。今思い返すと、まるで身内でも亡くしたかのように、彼女は泣いていた。その光景が、どうしても腑に落ちないでいた。

「瀬郷君」

不意に耳元で、山下の無感情な声が響いた。振り向くと、山下の顔があった。

「代わろう。私が授業をするから、君は後ろで見学でもしているといい」

「いや、あの――」

反論する間もなく、手からチョークを奪われた。山下は黒板に続きを書き始め、洋輔はその姿を呆然と見つめていた。

やがて自分の愚かさ気づき、後悔が津波となって洋輔に押し寄せてきた。そんな洋輔に生徒たちは目をくれず、黒板を注目していた。

重苦しい雰囲気漂う中、教室の後ろに移動して先ほどまで山下がいた場所に立った。

洋輔は思い知らされた。今の精神状態では、授業をやっていくの

が厳しいということに。

事件のことが頭から離れず、佳代のことも同じくらい気になっていた。自然と、佳代の後姿へ目を向けているのが、何よりの証拠だった。

佳代の後姿は、他の女生徒と比べても美しさが際立っていた。背筋が伸びていて、自信がみなぎっているように見える。

しかし何故、瞳は輝きを失っていたのだろうか。

解せない疑問を胸に抱きつつ、授業の終わりを告げるチャイムが鳴り終わっても、洋輔は佳代の後姿だけを見つめていた。

第九章

休み時間だというのに、生徒誰一人歩かない静かな廊下を、山下と洋輔はお互いに少し距離を置きながら、ゆっくりと歩いていた。

「やっぱりまだ、授業には慣れない？」

山下の口調には、とげがあった。自分の未熟さを反省しつつも、どこか片隅で佳代のことを思う自分もいた。

「また次の時間、授業あるけどどうする？」

正直、やっていける自信がなかった。教える立場であるのに、自分の学力が生徒たちよりも下回っているのと、余計なことを考えて集中できないのが、主な原因だった。

しかし、いつまでも見学しているわけにはいかない。このままじや学校側は、強制的に教育実習を中止するかもしれない、という危惧が芽生え、洋輔は無意識の内に手を上げていた。

「うん？」

何故手を上げているのかと、首を傾げて山下は洋輔を見た。

「次の授業、やります」

手を上げたことは、授業をやるという洋輔なりの意思表示だった。

「そうかい」

不安そうな色を隠そうとしない山下を、見返してやろうという思いを洋輔はいつの間にか抱いていた。

気づけば、三年二組の前に立っていた。二時間目に、世界史を教えるクラスだ。

緊張と不安を悟られないよう、堂々とした足取りで教室の中へ入っていた洋輔だったが、途中、緊張のせいか何もないところでつまづいてしまい、山下の苦笑を誘った。生徒たちは、つまづいた洋輔には目もくれず黙々と自習に専念していた。

せめて笑って欲しかった洋輔は、少々残念な気分に陥った。

「えーと……」

教壇に立ち、洋輔が唸りながら授業の準備をしている最中に、二時間目の始業を告げるチャイムが校内に鳴り響いた。一斉に、生徒たちは自習を切り上げ世界史の準備をする。五組で見た光景と、寸分の狂いもなかった。

「それでは、授業を始めます」

洋輔の一言で、生徒たちは身構え、表情を引き締めた。授業に対する真剣な態度が窺える。

こいつらは勉強に人生を捧げているのか——今更だが、そう痛感させられた。

「それじゃあ、今日は……」

授業内容を書いたノートを片手に持ち、洋輔は生徒たちに背を向け、チョークで今日やる授業のタイトルを書いた。生徒たちは、真剣な面持ちで黒板に注目している。

堅苦しいと感じつつも、それが宝徳学園のだと自分自身を無理やり納得させ、徹夜で書いたノートの内容を黒板に書き写す。

時折生徒たちのほうを向いて解説を入れているが、口調に感情は込められていなかった。

というのも、洋輔の心は別のところにあっただった。

この教室の生徒たちを見て、残念ながら、ますます他殺説が有効になってきた。そして、姫島が殺されるような動機を十分に持っていることも、思い知らされた。

やはり姫島は、勉強がらみで宝徳学園の生徒に殺されたのだろう。三学年の中でも群を抜く成績を持つ姫島が狙われるのは、不謹慎だが、当然といえば当然であった。姫島を勉強で越えることはできない。姫島のせいで、成績が伸び悩んでいる。

だったら、姫島を消せばいい——そのような考えが、三年生の中で渦巻いていたとすれば、どうなる。

姫島は、受験を理由に殺されてしまったのか……。

洋輔は、やりきれない気持ちで一杯だった。

昼休み、洋輔は閑散とした食堂にいた。

お昼時なのに食堂が閑散としている理由は、ほとんどの生徒が教室で食事を済ますからだった。理由は、教室でお昼を食べればすぐに勉強を再開できるという、宝徳学園らしい理由だった。

カレーを頼み洋輔は一人席に座ったのだが、まだ一口もつけていなかった。食べる気力が湧かなかったのだ。

普段は食べるほうだと自負しているが、生徒の誰かが姫島を受験のために殺してしまったのかと想像すると、食べ物に喉を通らなかった。

姫島が殺された動機があるとすれば、少なからず勉強と関係しているのではないかと考えていたが、とくにそれらしい動機も浮かばないだけであって、今の段階ではそう決め付けていた。

食べもしないのに、スプーンでカレーとご飯を適当に混ぜていると、目の前の席にうどんが置かれた。

見上げると、佳代が笑みを浮かべて立っていた。

「どうしたの、先生。元気ないじゃん」

明るく振舞う佳代を見ると、胸が締め付けられる思いがした。佳代は、この事件で深く心に傷を負っているはずだ。それなのに、佳代は遅刻してでも登校して、普段通りに学校生活を送っている。

佳代が何故、姫島の死を悲しんでいるのかどうしても解せなかったが、これ以上詮索する気は、洋輔にはなかった。

自惚れているかもしれないが、いつか頼ってきて話してくれるだろうという思いが、洋輔にはあった。

「カレー食べないの？ おいしいのに」

物欲しそうな顔で洋輔の頼んだカレーを見つめた後、佳代は自分のうどんに手を付けた。

「うん、やっぱり久々のうどんはいいねえ」

無邪気にうどんをすすする姿は、とても可愛らしく、無意識の内に洋輔は佳代のことを見つめていた。

「うん？」

見つめられていることに気づき、佳代は箸を止めて洋輔を見た。視線が交わっただけでも、洋輔は幸せだった。いけないことだと自覚しながらも、本能に従い視線を外さない。

「なんか様子変だよ？」

さすがに気味が悪かったのか、佳代は苦笑を浮かべて言った。

「え、いや、べつに」

分かりやすく動揺して、洋輔は視線を落とし再びカレーとご飯をかき混ぜる作業に戻った。佳代はくすつと、小さく笑った。

「食べないの？」

端から見れば、様子がおかしいのは明らかだった。それでも、手を止めることはなかった。

頭の中では、必死に思考を巡らせている。全ては、事件を解決するため。

「変なの」

暗い表情を浮かべ依然カレーをかき混ぜている洋輔に、佳代は呆れ顔を向けて言った

「でも、変なのは先生だけじゃないかも」

独り言のように呟いた佳代の言葉を、洋輔は聞き逃さなかった。

「俺だけじゃない？」

食いついてきた洋輔に訝る目を向けながらも、佳代は頷いて言った。

「だって、生徒が自殺したというのに、皆平気な顔をしてさ。むしろ、喜んでいるようにも見えるよ」

自分だけじゃないのだと、洋輔は少し安心した気分になった。佳代も、この状況に納得していない。

「けど、当然なのかな。彼、学年一位だし」

「姫島君のこと、知っているの？」

なるべく驚いた顔を作ろうと意識しすぎたせいで、表情が引きつるのを感じた。声も上ずってしまい、佳代に何か悟られたのではなにかという不安が芽生えた。

佳代は、何も気づいていない様子で答えた。

「まあ、ね。この学園での学年一位が有名になるのは当然だよ」
淡々とした口調だった。

佳代の答えはもっともで、成績トップの生徒の名前を知っていることは、ごく自然に思えた。

しかし、上手く言葉で説明することは出来ないが、どうしても佳代の言葉には引っかかりを覚えてしまうのだ。

何故だ――自問するが、謎は深まるばかりであり、事件の真相から遠ざかっていく気がした。

「やっぱ変だよ？」

本気で佳代を心配させてしまったことに、洋輔は申し訳なさを抱いてしまった。平静を装わなければならぬ。言い聞かせてはいるのだが、なかなか言うことを聞いてくれなかった。

「あのさ、安東さん」

箸を止め、佳代は顔を上げた。

佳代を直視することが辛くなった洋輔は、視線を逸らして口を開いた。

「これって、事件なのかな？」

「え？」

困惑の色を、佳代は浮かべた。構わず洋輔は続けた。

「姫島君が飛び降りたのって、事件かな？」

「事件……じゃない」

語尾を上げ、肯定とも否定とも捉えられないような答え方をした。

「安東さんは、姫島君は本当に自殺したと思う？」

核心を突くような言い方だった。佳代は、姫島の死についてどう思っているのか。知るのは怖い気もした。けど、知らなければ前へ進めない気もしていた。

「自殺じゃなければ、何？」

「殺された……とか？」

二人の間で沈黙が生じた。この沈黙が洋輔にとっては苦痛で、生

きた心地がまるでしなかった。

悲しみに暮れている佳代に、このような質問をぶつけてしまったことを後悔しているが、もう後戻りは出来ない。できるのは、佳代の答えを待つだけだ。

数十秒経った頃、佳代はおもむろに口を開いた。

「そうだよ」

あまりにも簡単に言うので、洋輔は一瞬理解することが出来なかった。

しばらく経って、佳代が軽く放ったその言葉を頭の中で反芻する。整理がまだ出来ないというのに、佳代は追い討ちをかけてきた。

「姫島君は殺されたの。この学園の生徒の誰かに」

佳代の言っていることは本当なのか。佳代の表情は真剣そのもので、洋輔を騙そうとして言っているのだとすれば、女優になれる才能を持っていた。

佳代は一体、何を知っているのだ。

「ねえ、ちょ——」

「きやははは」

突然、静寂に包まれている食堂に佳代の笑い声が響いた。

「もしかして、信じた？」

佳代は腹を抱え、笑っている。

「嘘だよ、嘘。私が知っているわけないよ」

嘘——？

「だって、私そもそも姫島君に興味ないし。先生、すごく真剣だったから、少しからかってやろうと思って」

洋輔の中で、ふつつつと湧き上がるものがあつた。

「姫島君は自殺でしょ。遺書、残されていたんでしょ」

無言で、洋輔は佳代のことをみつめていた。

「自殺だよ、自殺。受験に、彼は負けたんだよ」

「嘘、ついているよね」

冷たい声で、洋輔は呟くように言った。佳代に、動揺の色が走る。

「安東さん、姫島君に興味ないって言っていたけど、一番泣いていたのは君じゃないか」

詮索しないと決めていたが、佳代に話す気はないどころか、ごまかそうとしているので、洋輔はついに質問をぶつけてみた。

「君は、姫島君の何なんだ？」

姫島との関係を悟られないために、佳代は無理に明るく振舞っているように見える。

そう思うからこそ、明るく振舞う佳代を見ると胸が引き裂かれるような感覚を味わうのだ。

「本当のことを……喋ってほしい」

心の底からの叫びを、口にした。佳代は、冷たい目をして洋輔を見つめている。

再び数秒間の沈黙が流れ、やがて佳代は口を開いた。

「私……」

続きを、洋輔は待った。どんな答えを聞こうとも、洋輔は佳代を守ると誓っていた。

「知りません、何も」

佳代は、心を開いてくれなかった。大きな失望感を抱き、がっくりと肩を落として、顔を俯かせた。

そんな洋輔を尻目に、佳代はまだ半分以上残っているうどんを載せたお盆を持ち、席を立った。

「それじゃあ、先生。私、行くから」

佳代の口調に感情は込められていなく、まるで他の生徒や先生たちと一緒にいた。洋輔は、ショックを隠さずにはいらなかった。

佳代に嫌われ、収穫できたものは何もない。心の中に、空しさだけが残った。

そして洋輔は、気づいた。自分が事件を追っているのは、真相を知りたいだけじゃないということを。むしろ、本当の理由は別にあった。

佳代を守りたいからだ。

姫島が死んだことによって、佳代は深く傷を負った。悲しむ佳代の顔は、これ以上見たくない。

犯人を見つけて、必ず佳代と同じ悲しみを負わせてやる。

いつの間にか洋輔は、中学二年生の頃に起こしてしまった、傷害事件のことを思い出していた。

年を重ねても、絶対に忘れることの出来ない事件。

洋輔が、初恋の人を守ろうとして起こした事件だった。

その初恋の人と佳代を、自覚なく重ねていたのだ。

だから、犯人を探すのに必死だった。佳代を悲しませた犯人を必ず見つけ出し、佳代と同じ苦しみを与えるために。

ひどく自分勝手な考え方だったが、いつでも自分は間違っていないと思い込んでいて、正しいとさえ思っていた。

自分は間違っていない。正しいことを、しているのだ。

中学二年の頃を今更思い出している自分に自嘲気味の笑みを浮かべ、一口も手を付けていないカレーを持ち洋輔は席を立った。

第十章

洋輔は、煮え切らない気持ちを抱え食堂を出て、一階まで駆け下りて行った。食堂があるのは二階だ。

洋輔が向かっているのは、保健室だった。自分が倒れた原因を探るため、保健室に立ち寄ることを決めたのだった。

昼休み終了まで、残り五分を切った。五時間目に授業を控えているので、着いてすぐ予鈴が鳴ってしまうだろうが、構わなかった。松平と放課後、保健室で話す約束を取り付けるのが、洋輔の目的だった。

保健室から少し離れた場所に立ち、その場で深呼吸をした。松平と会うことに、緊張を抱いている自分がいた。

一歩ずつ、慎重に歩みを進めようとした矢先、保健室から一人の生徒が姿を現し、とっさに背中を向けた。生徒は、洋輔の方を見ずに反対方向へ駆けていった。

生徒の走る音が遠ざかったのを確認して、洋輔はゆっくり振り返った。

一瞬だが、生徒の顔を見た洋輔は、どこか引っかけりを覚えていた。

どこかで見た顔だった。しかし、なかなか思いだせずにいた。片隅に眠っている記憶を探り寄せてはみるが、やはり無理だった。

洋輔が必死に生徒の顔を思い出そうとしていると、昼休みの終了を告げるチャイムが校内に鳴り響き、洋輔は思考を停止させ、諦めて授業を行う教室まで戻ることにした。

第十一章

気づけば、窓の外は夕焼けに包まれていた。

職員室で、感慨深げに夕焼けを眺めていると後ろから声をかけられた。

「なかなかよかったよ」

山下は隣に立ち、洋輔のほうは見ず言った。洋輔も、山下のほうへ目を向けなかった。

お互い、無言のまま窓の外に移る夕焼けを眺めていたが、沈黙が苦しいとは感じなかった。むしろ、心地よい気がした。

不思議な思いでいると、山下のほうから喋りかけてきた。

「一時間目は、どうやら気が散ったみたいで授業にならなかったが、それ以外はなかなかだった」

誉めてもらえたことに嬉しさは感じたものの、正直言うと、今日自分がどのような授業をしたのか思い出せなかった。

授業中、洋輔は他のことばかりを脳裏に思い浮かべていた。

事件のこととか、佳代のこととか。

ノートをただ黒板に写して、途中、ノートに書かれている解説を加えていただけだったため、端から見れば授業は成立しているように見えただろう。

明日もこんな感じになってしまうのだろうかと思いながら、洋輔は重いため息を吐いた。

「どうした？ 疲れたか？」

「いえ、別に」

教師になるため教育実習に来たつもりだったのに、いつの間にか自分の中で、佳代を悲しませた犯人を見つけるため、教育実習を続けていることになっていた。

今更、軌道を修正しようとは思わないが、せめて一回だけでも、事件のことを忘れて授業をしてみたいものだ、しみじみ思った。

それはおそらく、事件を解決しなければ無理だろうと、洋輔は覚悟していた。

「最初はどうなるかと思っていた。けど、やればできるじゃないか」
山下は意外といい人なのかもしれない、そのような思いが芽生え始めた矢先、ポケットに入れてあった携帯が震えているのを察知した。

「あ、すみません」

頭を下げ、洋輔は職員室を出て携帯を開く。案の定、かけてきたのは館林だった。

「もしもし」

通話ボタンを押し、画面を耳に近づけて洋輔は言った。

「あ、瀬郷さん。どうですか、捜査のほうは？」

単刀直入すぎる言い方に苦笑しつつも、洋輔は自分の考えを話した。

「これってやっぱり、他殺ですよ」

「ほう」

興味深そうに耳を傾けている館林の姿が、自然と脳裏に浮かんでくる。洋輔は続けた。

「僕の推理では、犯人は宝徳学園の三年生の誰かです。彼らなら、学園トップの姫島君を自殺に見せかけて殺そうとする動機を、十分に持ち合わせていると、僕は思います」

「なるほど」

「宝徳学園の生徒たちは皆、勉強に人生を捧げている勢いです。姫島君は、進路の大きな妨げになるわけですよ。つまり、受験のために姫島君を殺した」

「素晴らしい！」

館林は、感嘆の声を上げた。

「素晴らしいですよ、瀬郷さん。まさに、その通りです」

「どういことですか？」

館林の言い方には、断定的な響きがあった。まだあくまで仮説の

段階で、そうは限らないはずなのに、刑事の館林はそれを信じて疑わない様子だった。

「それが答えなんですよ、瀬郷さん」

引っ掛かりを覚えたが、とくに突っ込むことはせず、洋輔は乗った。

「けど、容疑者はたくさんいることになりますね」

「そこが、この事件の最大の難関でしょう」

館林の言葉を聞き、洋輔はさらに不信感を募らせた。

電話越しでも伝わってくる――館林の、偽善的な微笑が。

何が洋輔にそう思わせているのか、答えはすでに出ていた。

だがそれを、洋輔はあえて口にしないでしばらくの間、館林の言動に耳を傾けることにしていた。

「きつと、容疑者を絞るための手がかかりがあるかもしれません。私も折り合いを見て捜査に参加するので、瀬郷さんも頑張ってください」

生徒たちを抵抗なく容疑者扱いする館林に、非難めいた気持ちを抱いた。確かに自分もそうのように考えているが、刑事が偏見だけで捜査をしていいものかどうか、疑問に思う。もう少し、慎重を期すべきではないのか。

館林も、洋輔に何か隠している。言動や考え方が、怪しすぎる。

姫島の死について、教育実習生の洋輔の力を借りてまで捜査するのは、姫島とは小さい頃に親交があったからだと勝手に解釈していたが、実は違うのかもしれない。実際、本人に確かめたわけではないのだから、まるで見当違いである可能性が高い。館林の発言を聞いている内に、そう思えてきた。

「それでは、また電話しますので」

言い終えると、こちらが何か返答する前に館林は通話を切った。

まだ仕事は片付いていないということか。

勤務中にも関わらず電話をしてくる館林の行動は、十分怪しむ材料に値した。

携帯をポケットに入れると、洋輔は不意にやるべきことを思い出した。

「保健室だ……」

思わず声に出していた。

朝、決めていたはずだった。松平のもとへ行くことを。

倒れた原因を突き止めるために。

「じゃあ、私は帰るから」

言いながら、山下はカバンを片手に持ち職員室から出てきた。

「ありがとうございます」

軽く頭を下げ、今日一日授業をサポートしてくれた先生に感謝の言葉を口にした。

「まだ一ヶ月もあるんだ。気長にやろう」

振り返らず、背中を向けながら言って、オレンジ色に包まれている廊下を歩く姿は、画になった。映画のワンシーンを見ている錯覚に陥った。

山下の姿が遠のいてから、見とれている場合じゃないということに気づいた。とにかく、保健室へ行かなくては。

洋輔は、気持ち駆け足で保健室に向かった。

「まだ、やっているよな……」

保健室のドアの前に着き、自分に言い聞かせるように独り言を呟いた。一見、電気は点いていないように見受けられる。松平はいるのだろうかという不安が、脳裏を掠めた。

ノックしてみるが、中から返事はなかった。やはり、不在なのか。期待していただけに、落胆も大きかった。

「開いている……」

一縷の望みをかけて引き戸に手をかけたところ、見事に動いた。鍵はかかっていないようだった。

小さくガッツポーズをし、引け目を感じ小声で失礼しますといいながら、そっと保健室に入った。

物音一つしない静けさは、洋輔の恐怖を募らせた。早くここを出て行きたいという衝動に駆られたが、今更引き返すことなどできるわけもなく、室内を見回すことにした。

初めて保健室を訪れた時とはまた、違った印象を受けた。あの日は気分が悪かったせいか、あまり周りを気にする余裕などなかったが、こうしてじっくり観察してみると、色々な発見に驚きを覚えた。大きな棚に陳列されている薬品の種類の豊富さや、白を基調とした壁は、高校の保健室ではなく、大学の研究室を彷彿とさせた。

しばらく見学していると、視界に養護教諭準備室という札が飛び込んできた。洋輔の好奇心は、ここでいよいよピークに達する。

ドアの前まで来ると、深呼吸を何度か繰り返した。神経を張り詰めていたせいで、疲労が想像以上に蓄積されていた。頭がふらつく。深呼吸を繰り返すことで、何とかコントロールしようと試みたが、残念ながらあまり効果は現れなかった。

覚悟を決め、ドアノブに手をかける。幸いにも、このドアの鍵もかかっていなかった。松平の無用心さには、呆れ返ってしまった。何を考えているのだろう、あの人は。

ガチャ、という音とともにドアが開く。動悸が激しくなり、体外に漏れてしまっているのではないかと、一瞬心配した。

養護教諭準備室は保健室と同じくらいの広さを誇っており、ベッドが置いていないという以外では、ほとんど保健室と同じ内装をしていた。

やはり、準備室にも松平の姿はなかった。松平は、鍵一つかけないで保健室を空けているということになる。すぐに戻るからかける必要がない、という考えからなのか。

色々と思いを巡らせていると、ある疑問が不意に脳裏を過ぎった。そもそも、自分は どうしてここにいるのだろうか――。

まず念頭に置かなければならない問題だった。自分がここにいる理由。倒れた原因を突き止めるためだと、最初は信じていたが、考えてみると保健室に入ったところで、解決することでもないような

気がしてきた。

原因は、薬にないのかもしれない。

もっと別の問題が、自分にあったとすれば。

ここまで来て意味がなかったと悟ると、口から大きなため息が自然と漏れた。松平が戻ってくるかもしれない可能性を考慮して、帰ろうとすると、後ろから人間ではない声が耳に飛び込んできた。

「え？」

思わず声が出てしまった。この声は、何だ。

恐る恐る辺りを見回すと、とくに不審なものは見受けられなかった。

気のせいかな、胸中で呟いて今度こそ帰ろうとしたところに、また人間ではない声が、準備室に響いた。その声は、まるで助けを求めているかのようなだった。

「なんだよ」

いよいよ不気味になった洋輔だったが、正体を突き止めたいという欲求を抑えることは出来ず、言いながら辺りを探り始めた。

すぐに答えは見つかった。ゴミ箱をあさると、ネズミが一匹、衰弱した状態で捨てられていたのだ。

「ネズミ……？」

上から覗き、洋輔は呟いた。他の書類と一緒に捨てられているネズミは、哀れだった。

「どうして」

何故ネズミが、ゴミ箱に捨てられているのだ。しかも、衰弱しきった状態で。

まさか、松平がネズミを弱らせてゴミ箱に捨てたのか。

それ以外考えられない。松平以外、この部屋を使う者はいないのだから。

次に考えなければいけないのは、ネズミを弱らせてゴミ箱に捨てる理由だった。松平は、どんな思考回路をしているのだ。憤りを覚えるとともに、松平という人物に対し恐怖を抱いていた。

この部屋をあされば何か分かるかもしれない、そう信じて、洋輔は引き出しやら机を探る。もちろん、あとで帰ってきた松平にばれないよう、動かしたら所定の位置に戻すことを念頭に置いて。

「お」

薬品が陳列されている棚の引き出しを開けると、大量の資料の上に錠剤の入れるビンが見つかった。そのビンに、薬は入っていないかった。

洋輔の興味を駆り立てたのは、ビンに貼られているメモ用紙だった。細かな文字が、綴られている。

「吐き気を抑制する薬……」

呟くように、文字を読み上げた。吐き気を抑制する薬、ということとは、あの日洋輔に飲ませた薬はこれだったのか。一粒も入っていないところを見ると、どうやらあれで最後だったらしい。

少し残念な気分に陥った。一粒でも残っていれば、知り合いの医学部を専攻しているやつに、薬の成分を調べてもらえたのに。

がっくりと肩を落とすと、ビンをもとの位置に戻して、今度は下の引き出しを開けた。

同じように、大量の資料の上に錠剤を入れるビンが置かれていた。中には、二つの錠剤が入っている。

洋輔の注意を惹いたのは、やはりビンに張られているメモ用紙だった。しかし、メモ用紙に書かれている文字が、洋輔に戦慄を与えた。

「実験……用」

心の底から振り絞り、文字を読み上げた。実験って、一体何のことだ。松平は、準備室で一体何をしているのだ。

と、ここで先ほど見た光景を思い出す。

衰弱して捨てられていたネズミと、実験という文字が見事に結びついた。

つまり松平は、この準備室で動物実験を密に行っていたのだ。実験台は、あのネズミだ。

途端に、背筋に悪寒が走る。松平に対する恐怖が、いつそう強ま

った。自分の倒れた原因を探ろうと忍び込んだが、思いがけず松平の秘密を知る結果となってしまった。

松平に見つかったら、どうなるだろうか。潔く罪を認めてくれるだろうか。それとも、二度と口の利けない体にされてしまうだろうか。

色々な不安が脳裏を駆け巡り、しばらくして脳が洋輔に訴えかけた。

逃げろ――と。

刹那、洋輔は実験用の錠剤が入った薬を開けたままの引き出しに放り投げて、駆けていた。今、洋輔を支配しているのは恐怖以外の何物でもなかった。

ドアを乱暴に閉め、保健室を脱出するのにもう少しというところで、なんと松平が帰ってきてしまったのだ。

松平を見た瞬間、額に冷や汗がにじみ出てきて、スーツの下に着ているワイシャツに汗がたっぷりと染み込む気持ち悪さを感じた。

「あれ、瀬郷君」

何も知らない松平は、どうしたの、というような軽い感じで言ってきた。

「松平先生……」

今にも泣きそうな表情で言う洋輔に、ただ事ならぬ事態を察したのか、真剣な面持ちで松平は問うた。

「どうした、気分でも悪いのか？」

口を噤む洋輔に、松平は首を傾げた。

「何なの、何があったの？」

口元をほころばせて言う松平だったが、瞳は笑っていなかった。

「いえ、何でもありません」

「何でもあるでしょう」

膝を震わせ、時期に似合わず大量の汗を流している洋輔を見れば、誰でも何かあったのではないかと心配する。

早くここを脱出したい洋輔は、頭を下げて強引に保健室を出よう

とした。

「ねえ、ちょっと」

何をしていたのか話さず出て行こうとする洋輔を、松平は手を伸ばして呼び止めた。

「理由があつて、ここを訪ねてきたんじゃないの？」

その理由を話すわけにもいかず困惑していると、別の質問をされますます泣きたい衝動に駆られた。

「ここで、何していたの？」

優しく問いかける松平だったが、忍び込んでいたことを叱責する響きが含まれていた。

「いえ、べつに」

答えず、洋輔は走って保健室を脱出しようとする、今度は腕ががちりと掴まれてしまった。

「君に質問がある」

「は？」

ほぼ泣き声に近い口調で言うと、松平は少し表情を和らげて訊いてきた。

「最近、君が電話をしている姿を目撃しているが……」

「それが、何か？」

「電話の相手は、なんていう男だい？」

答えるわけにはいかず返答に窮していると、松平はじれったそうに言った。

「姫島君が飛び降りたときにやってきた刑事だよね？ 名前は、館林かな」

「館林刑事を知っているんですか？」

思わず自白めいた言葉を出してしまったが、衝撃が大きかったせいで、気にしている余裕などなかった。

「さあ、どうだろうね？」

何か企みを含んでいるような笑みを浮かべ松平は言った後、ゆっくりと手の力を緩め、離れた。

捕まれていた手を離されても、洋輔はこの場から立ち去ろうという気は不思議と起こらなかった。何故松平は、洋輔の電話の相手が館林だということを見抜いたのだろうか――その疑問が頭に引っかかり、この場に留まらせていた。

「やはりな……やつは……」

一人納得顔で呟いているのを、洋輔は静かに見守っていたが、やがて松平は顔を上げると言った。

「用がなければ、私は行くけど」

洋輔は軽く頭を下げて、逃げるようにして去っていった。

色々な問題が急に浮上してきて、洋輔の頭はすでにパニック寸前だった。

まずは、松平が動物実験をしていたことについてだ。

松平は、危険な男だ。あの笑みの下には、残虐な表情が隠されているに違いない。

準備室で動物実験していたことを、告発するかと一瞬考えたがすぐに打ち消した。場所が場所だけに、松平は、細心の注意を払って動物実験を行っているはずだ。洋輔がさきほど準備室に忍び込んだことも、何かの拍子で気づくだろう。気づいた松平は、証拠を隠滅しようとするに違いない。そうなった場合、告発したところで証拠がない以上、松平は罪に問われることはない。不利な立場になるのは、洋輔のほうだった。告発するとなると必然的に、準備室に忍び込んだことを告白しなければいけない。動物実験のした痕跡が残されていればまだ何とかかなると思うが、消された後で何も見つからないと、どうして準備室に忍び込んだのか問われるに決まっている。松平からも、告発したことで報復される可能性があった。

走りながら思考を巡らせていると、ふとある考えが洋輔の頭の中に芽生えた。

自分が倒れた原因もあの薬にあるのではないかと。

松平が自分に、動物実験用の薬を飲ませたとしたら、辻褄が合う。気分が悪くなって倒れたことも、無意識のうちに暴れたことも、体

の中から発見された微量の薬の正体が不明だったことも。微量だったという理由もあるだろうが、松平がオリジナルで調合した薬であったから、医者も何の薬なのか分からなかったのだろう、と解釈した。

しかし、松平が自分に動物実験用の薬を飲ませたとして、その理由が判然としない。松平に、初対面の洋輔を陥れる動機が全く見当たらないのだ。

そこは本人に確認する以外、知る方法はない。幸いにも、こちらは松平の弱みを握っている。動物実験のことをちらつかせれば、松平は自分に告白してくれるかもしれないという期待を、洋輔は抱いていた。

次に、洋輔が館林と接触しているのを見抜いていたことについてだ。

当てずっぽうで言っているとは、到底思えない。何より、どうして館林のことを知っていたのか、洋輔は疑問に思った。食堂に集められた中に、松平は確かいなかったはずである。

何もかもが謎だらけで、泣きたい気分だった。

必死に頭を働かせている最中、ポケットが震えているのに気づき、おかげで思考に集中していた意識が現実へと引き戻され、立ち止まった。しっかりと前を見据えると、突き当りであることに気づいた。危うく壁に激突するところだったのだ。

携帯を取り出し、画面を開く。着信を入れてきたのは、館林だった。さきほど電話で話したばかりなのにと、うんざりした気持ちで、電話に出る。

「もしもし」

露骨に不機嫌な口調になってしまったことを、若干反省した。

「あ、瀬郷さん」

館林は、洋輔の不機嫌な口調を気に留めることなく、高ぶった口調で言った。

「明日、私も捜査に参加します」

唐突な話だった。館林が合流するのに大分時間を要すると予想していただけに、困惑も大きく、素直に喜ぶことが出来ずにいた。

「でも、大丈夫なんですか？」

恐る恐る訊くと、嬉しそうな館林の声が聞こえてきた。

「ええ。心配には及びません」

「そうですかあ」

ため息混じりに発した。館林がどのような手段を用いて時間を作ったのか、あまり想像しなかった。

「瀬郷さんの推理、非常に興味深く聞かせていただきました」

つい一時間ほど前のことを言っているのだろう。洋輔は、姫島が受験のために自殺と見せかけて殺されたと推理し、それを館林に話した。館林は、まるでその言葉を待ち望んでいたかのような態度を示した。

不自然――。

一瞬、その単語が脳裏を過ぎる。

「ここまで分かっているのであれば、ゴールは間近です。頑張りましょう」

受験を理由で殺されたと、館林は断定している様子だ。洋輔もその可能性は高いと思うが、断定の域までは達していない。考え方の微妙なずれが、疑惑を徐々に募らせていた。

「明日、瀬郷さんは何時間目に授業が入っていますか？」

「えっと……確か、一時間目と四時間目です」

「そうですか。では、明日の昼休みに学校のほうへお伺いします」

「昼休みですか」

ため息混じりに洋輔は言った。急すぎる展開に、不快感を露にする。ベテラン刑事特有なのか、そんな態度に館林は臆することなかった。

「大丈夫ですよ」

館林の口調には強引に自分の意見を押し通す勢いがあり、洋輔としてはあまりにも唐突なため若干不満を持っていたが、それでも捜

査に合流してくれることは嬉しいことであるのは間違いないので、はいと返事をした。

ようやく、館林と捜査をすることができる。

事件は、上手くいけば終結するかもしれないという期待を抱かずにはいられなかった。

だが、その一方でこの事件はそんな単純なものではないと考えている自分もいる。そのことに当惑し、思考を必死に巡らせる。

「それじゃあ、また明日。学校で会いましょう」

言って、館林は洋輔の言葉を待たずに電話を切った。そのことから、本人が一番捜査に乗り気であることが窺えた。口調からも、それは十二分に伝わってくる。

「明日、か」

天井を仰ぎ呟くと、洋輔は重苦しいため息をついた。

そんな簡単に、この事件を片付けてはいけない――。

受験のために姫島は殺されたと館林に話したのは自分であったが、改めて思い返すと、そうではないような気がしてならなかった。

この事件の裏には、もっと大きな思惑があるに違いない。

根拠のない想像を無責任に思い浮かべるが、そうしたところで、事件の真相など導き出せるわけがなかった。

洋輔に出来ることはただ一つ。

事件が解決されるまでの経過を、見守り続けることだ。

自分の無力さに自嘲気味の笑みを浮かべ、洋輔は職員室へ戻った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8691z/>

受験戦争

2012年1月1日21時49分発行